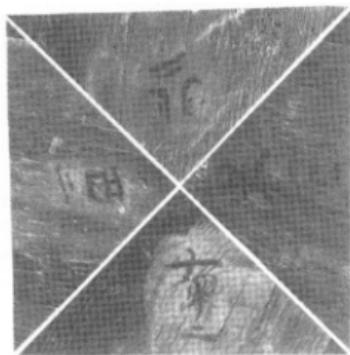
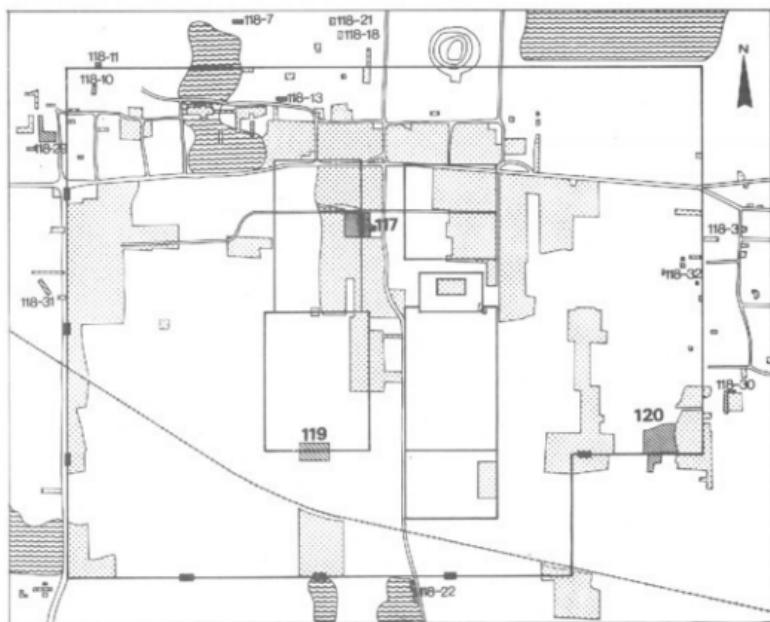


昭和54年度 平城宮跡発掘調査部
発掘調査概報



昭和55年4月

奈良国立文化財研究所



表紙カットは第117次発掘調査検出 SE9210枠板墨書き付

目 次

I	推定第一次内裏地区の調査(第117次)	3
II	推定第一次朝堂院南門の調査(第119次)	9
III	東院園池西南地区の調査(第120次)	15
IV	平城京の調査	
	①左京一条二坊十五坪の調査(第118-4次)	24
	②左京三条一坊十五坪の調査(第118-8次)	25
	③左京三条一坊八坪の調査(第118-22次)	27
	④左京三条二坊二坪の調査(第118-15次)	28
	⑤左京三条二坊七坪の調査(第118-23次)	29
	⑥左京六条一坊十坪の調査(第118-16次)	30
	⑦羅城門跡の調査(第118-26次)	31
	⑧右京一条二坊西一坊大路の調査 1(第118-29次)	32
	⑨右京一条二坊西一坊大路の調査 2(第118-31次)	33
	⑩右京五条二坊五坪の調査(第118-1次)	34
	⑪右京五条二坊十四坪の調査(第118-12次)	34
	⑫右京七条一坊十五坪の調査(第118-5次)	35
	⑬称徳天皇御山莊推定地の調査(第118-2・20次)	36
V	寺院の調査	
	①薬師寺境内の調査	38
	②薬師寺西面大垣の調査(第118-27次)	42
	③東大寺境内の調査 1	43
	④東大寺境内の調査 2	45
	⑤西大寺境内の調査	47
	⑥法華寺境内の調査(第118-9次)	48
	⑦法華寺阿弥陀淨土院の調査(第118-30次)	49
	⑧法隆寺境内の調査 1	50
	⑨法隆寺境内の調査 2	52

昭和54年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報

平城宮跡発掘調査部は、昭和54年度の発掘調査を次のように実施した。

＊本概報に収録

次 数	調 査 地 区	面 積	調 査 期 間	備 考
116	左京三条四坊七坪	奈良市大宮町5丁目)	3,300 m ²	54年 4.2~7.19 余良郵便局建設予定地
● 117	推定第 次内裏		3,200	9.19~11.12
● 118 - 1	左京五条二坊五坪	(奈良市六條町118)	110	4.10~4.26 蔵内進氏宅
● 2	称徳大皇御山莊推定地	(西大寺宝ヶ丘3-6)	3	4.24~4.25 梶谷義幸氏宅
● 3	法華寺跡境内	(法華寺町930他)	10	5.26~5.29 塚本示敬氏宅
● 4	左京一条二坊	(法華寺字小鍋1101)	74	5.7~5.16 塚本勝市郎氏宅
● 5	右京七条坊十五坪	(六条東町103-3)	61	5.14~5.17 店舗建設
● 6	北辺坊	(山陽町84-1)	40	5.30~6.4 菊池雅徳氏宅
7	御前池北辺	(佐紀町字門外2833)	7.4	6.14~6.15 上嶋一司氏宅
● 8	左京三条一坊十五坪	(北新町132他)	588	7.4~8.5 ホテル建設
● 9	法華寺跡境内	(法華寺町882)	63	7.23~7.31 横笛堂移転予定地
10	宮西北部	(佐紀西町2627)	26	8.15~8.17 一色賀二郎氏宅
11	北面大堀	(佐紀西町2681)	10.2	8.17~8.18 城田全康氏宅
● 12	右京五条二坊十四坪	(五条町432-2他)	25	8.27~8.30 木實忠雄氏宅
13	宮西北部	(佐紀町2717)	42	9.13 菅原弘次氏宅
14	左京 条一坊	(法華寺町2681)	14.2	9.21 尾崎義明氏宅
● 15	左京三条二坊二坪	(北新町121)	150	10.2~10.6 店舗建設
● 16	左京六条一坊十坪	(柏木町488-2)	140	10.11~10.17 まると工業
17	水上池北辺	(佐紀町2134)	18	10.8 川辺子氏宅
18	宮外北方	(佐紀町2794)	18	10.26~10.29 中鴨義典氏宅
19	宮外北方	(山陽町35)	6	10.31 榎本洋人氏宅
● 20	称徳天皇御山莊推定地	(西大寺宝ヶ丘3-6)	96	11.7~11.16 宮森正茂氏宅
21	宮外北方	(佐紀町2916)	6	11.20~11.21 富原アイコ氏宅
● 22	左京三条一坊八坪	(北新町215)	35	12.3~12.6 市道拡幅工事
● 23	左京三条二坊七坪	(北新町107-1)	160	12.17~12.21 新幸商店
24	宮北方	(山陽町41)	9	1.8 山本勇氏宅
25	法華寺跡内	(法華寺町1123-1-3)	12	1.16 塚本徳一郎氏宅
26	難波門跡	(鹿児島市觀音寺町)	30	1.28~1.30 防災工事
● 27	薬師寺西面大堀	(奈良市山西町408-9)	25	1.31~2.4 前川勝也氏宅
28	宮北方	(山陽町35)	9	1.30~1.31 榎本洋人氏宅
● 29	左京一条二坊西二坊大路	(三条町1丁目)	570	2.8~3.4 余良タマリ駐車場
● 30	法華寺阿勢陀淨上院	(法華寺町384)	60	2.16~2.25 春日野住水路工事
● 31	右京一条二坊西一坊大路	(二条町2丁目9-1)	46	2.21~2.26 奈文研新序舍下水工事
32	宮東辺部	(法華寺町字出浜内850-2)	9	3.17 大西義男氏宅
● 119	推定第一次朝堂院南門		2,130	3.15~11.10
● 120	東院蓮池西南地区		2,500	3.15~11.10
121	左京二条二坊六坪	(奈良市尼ヶ辻ゴドサ甲669)	400	1.9~2.4 市民文化センター建設
● (その他の)	泰妙寺跡内	(五条町423)	900	8.6~10.5 東大寺学園講堂改築
●	東大寺境内1	(水門町)	660	8.27~9.18 東大寺本堂建設
●	東大寺境内2	(雜司町406-1)	102	11.20~12.4 信託会館建設
●	西大寺境内	(西大寺芝町1丁目1-5)	214	10.23~11.1 東院臨門建設
●	法隆寺境内1	(牛駒郡御坂町法隆寺)	60	8.27~9.6
●	法隆寺境内2	()	387	8.25~4.12 防災工事

昭和54年度発掘調査一覧表

I 推定第一次内裏地区の調査（第117次）

平城宮の中央、朱雀門の北方地域は推定第一次内裏・朝堂院地域と呼ばれている。ここは平城山丘陵の末端に位置し、宮内でもとくに高燥な地域である。今回の調査地区は丘陵末端部が削平され、北側と大きな段差がつく。調査地区自体は南にゆるやかに傾斜し、そのほぼ中央部には、南北に奈良時代の築地痕跡と考えられる高さ約1.5mの土塁が連なる。上塁を境に東側が6ABD-C地区、西側が6ABQ-A地区である。

調査区の土層は耕土・床土が覆い、東側の部分では遺構面は削平され、直接花崗岩媒乱土の地山となる。西側は東側と同じ地山の上に2層の礫層がある。これは整地上である。北側ではこの2層の礫層の間に黄褐色質土の整地上が存在する。調査区の南側、第27次調査地区と接する位置では、地山は粘土層となる。

第一次内裏地区は1965年の第27次調査以来、今回を含めて8次の調査を重ね、今回で東半部の調査は終了した。

遺構

今回検出した主要な遺構は、埴積擁壁・石積擁壁・築地回廊・築地・土塁・建物2棟・塀3条・井戸1基・溝8条・斜道・礫敷広場・足場穴・土塙等である。

第一次内裏地区は区画の変遷から3時期に大別される。時期別に述べる。

A期 この時期の遺構には埴積擁壁SX 6600・礫敷広場SH 6603A・築地回廊SC 5500 A・B、塀SA 3777、斜道SF 9232 A、溝SD 3767 A・B、3790 A・B、9224、足場穴SX 3795 A・B、礫敷遺構SX 9229、穴SX 9225がある。

この時期には第一次内裏の東面は築地回廊・塀で区画される。築地回廊SC 5500は雨落溝SD 3767・3790、足場穴SX 3795によって復原できる。両雨落溝には上下2層ある。東の雨落溝SD 3767は素掘であるが、西の雨落溝SD 3790は石敷溝で、上層は西縁に礫を並べて鋪としている。下層は上層より礫の粒が細かい。足場穴SX 3795も、東の雨落溝SD 3767の下層を切り込むものと上層を切りこむものの2者がある。このことより、築地回廊SC 5500は建て替えが想定できる。

溝 SD 9224 は築地回廊基壇の掘込み地業である。第41次調査の SX 3800 に対応するものであろう。SX 9225 は築地回廊の礎石裾付の根石であろう。

塀 SA 3777 は今回11間分検出した。柱間は約 4.6 m 等間で、調査区のほぼ中央で1間分欠け、出入口が想定できる。柱掘方は約 1.2 m × 1 m の長方形を呈し、柱の位置を一段深く掘るものもある。深さは現状で最大 1.3 m を測る。掘方の埋土は版築的で非常に強固なものである。柱は抜き取られずに、当時の地表面で切りとられたものであろう。柱根・空洞を残すものがある。

第27・41次調査の所見を加えれば、A期の中で東面の区画は築地回廊→塀→築地回廊の変遷が認められる。

埠積擁壁 SX 6600 は第87次調査で南へ翼状に張り出すことが確認されていた。今回の調査で、築地回廊に直接とりつくのではなく、南へ約 15 m 張り出した位置で南折し、約 15 m 南で平坦面にとりつき、築地回廊との間約 15 m は斜道 SF 9232 A となって北側の壇にとりつくことが確認できた。埠積擁壁の塀は大部分取り除かれていたが、基底部の1・2段を部分的に検出した。SX 6600 の前面は厚さ約 10 cm 磁を敷いた礫敷広場 SH 6603 A となる。礫敷 SX 9229 は築地回廊の西側雨落溝上層 SD 3790 B と一緒になる粒ぞろいの礫敷である。

B期 この時期の遺構には、石積擁壁 SX 9230、礫敷広場 SH 6603 B、井戸 SE 9210、建物 SB 9220、斜道 SF 9232 B、柱穴 SX 9223、塀 SA 9228、土塙 S K 9231、溝 SD 9236、築地回廊 SC 8360 がある。

この時期には埠積擁壁 SX 6600 が埋め立てられ、約 20 m 南に石積擁壁 SX 9230 が築かれる。SX 9230 は基底部の一部とその抜取穴を検出した。斜道 SF 9232 B は傾斜をゆるめて存続する。SX 9230 の前面約 20 m は黄褐色質土で整地され、その上に磁を敷き、再び礫敷広場 SH 6603 B となる。整地と礫敷の間には後述のように若干の時間差がある。

建物 SB 9220 は斜道 SF 9232 B が平坦面となる位置に建てられる。SB 9220 は桁行 5 間、梁行 3 間、8 尺等間の北庇をもつ東西棟建物である。柱掘形は約 1 m × 1 m で、深さ約 60 cm を測る。この柱掘形は黄褐色質土を切り込むが、柱の抜取

り穴は上層の礫敷を切り込む。上層の礫敷は建物位置全面に敷かれるため、SB 9220は壁体をもたない吹放しの構造と考えられる。

井戸 SE 9210は発掘区の西端中央部、石積擁壁 SX 9230から約30m南に位置する。掘形は東西8m・南北7mの巨大なもので、東と南に段をもち、二段の掘形である。二段目は約5m四方である。掘形の深さは約4mある。掘形は青灰色粘土でうめられる。井戸枠は現存4段、高さ約80cm、内法約2.3mの宮内最大のものである。下から板・校木を交互に組む特異な構造である。井戸枠のそれぞれには番付が付される。校木は校倉の転用材で、風蝕がみとめられ、校倉の時の仕口をも残す。井戸枠は当初20段以上あったものと推定できる。

土塙 SK 9231は SB 9220の南にある土塙で、埠が多数出土した。柱穴 SX 9223は北へ20尺とると第87次の根石と対応するため、この時期の門と推定できる。埠 SA 9228も、門の目隠埠としうる。この時期の築地回廊 SC 8360の痕跡は本調査区では門以外検出していない。溝 SD 9236は幅1mの石紺溝で現存6mをはかる。石は大半抜き取られている。

C期 C期は2期に分れる。C₁期には築地 SA 3819 A、溝 SD 8226・土塙 S A 7130があり、C₂期には土塙 SA 3819 B、埠 SA 8238、溝 SD 8237・8239、建物 S B 9213・土塙 SK 9211・9213・9214・9215・9226・9233・9234・9235・9236がある。

C₁期は築地 SA 3819 Aで東面が削される。築地の版築は北側では地山上約5cm残るだけであるが、南側では約50cm残存する。溝 SD 8226は築地 SA 3819 Aの西雨落溝で、調査区の北端では軒瓦と礫で両肩を護岸する。東西埠 SA 7130は井戸 SE 9210の北側に構築される。今回の調査で13間分検出した。柱間は10尺等間、井戸の部分では14尺、築地には7尺で取りつく。

C₂期は築地が土塙 SA 3819 Bに改作される。積土は版築の行われた形跡はなく、非常に粗くつまれる。最大幅約3mを測る。土塙 SA 3819 Bの東約18mの位置に、さらに南北埠 SA 8238が構築される。溝 SD 8237・8239は東西両側の雨落溝である。土塙 SA 3819 Bと埠 SA 8238の間に桁行3間、梁行2間の南北棟建物 SB 9213が建つ。SB 9213の柱穴は小さく、仮設的な建物である。土塙からは多数の瓦

が出土している。

その他 時期を明確にしがたい遺構も存在する。築地中央部断ち割り部分で検出した2条の平行した浅い溝SD9219・9221は溝間1.5mを測る。築地もしくは築地同廊の築地部分の版築の際の堰板の痕跡と考えられる。

SB9218は桁行2間、梁間1間。SB9216は桁行4間、梁間1間で桁行9尺、梁行10尺の柱間である。SB9216は堀SA3777の掘形を切って建てられる。これらは掘形もしっかりせず、仮設建物か足場であろう。築地南の断ち割り部分で3間分検出した南北堀SA9217は土塁の積土に覆われ、築地の版築を掘り込む。築地北端の断ち割り部分で1間分検出した南北堀SA9222は築地の版築土に覆われる。南の柱穴から軒平瓦6732が出土した。これらの堀も仮設的なものであろう。

遺 物

今回の調査で出土した遺物は瓦・埴・土器・金属器・木器・木簡があるが、出土量はきわめて少い。

瓦は埴積擁壁SX6600を埋めた所から平城宮第Ⅰ期(和銅元年～養老5年)の瓦が出土した他は、第Ⅲ期(天平17年～天平勝宝年間)の瓦が多数を占める。埴はSX6600の前面と、土塙SK9231から多数出土した。

土器の量はきわめて少い。このことは今回の調査区が一貫して広場であったことによる。井戸SE9210からは10世紀代の土師器が出土し、井戸の抜取穴からは11世紀代の瓦器が出土した。

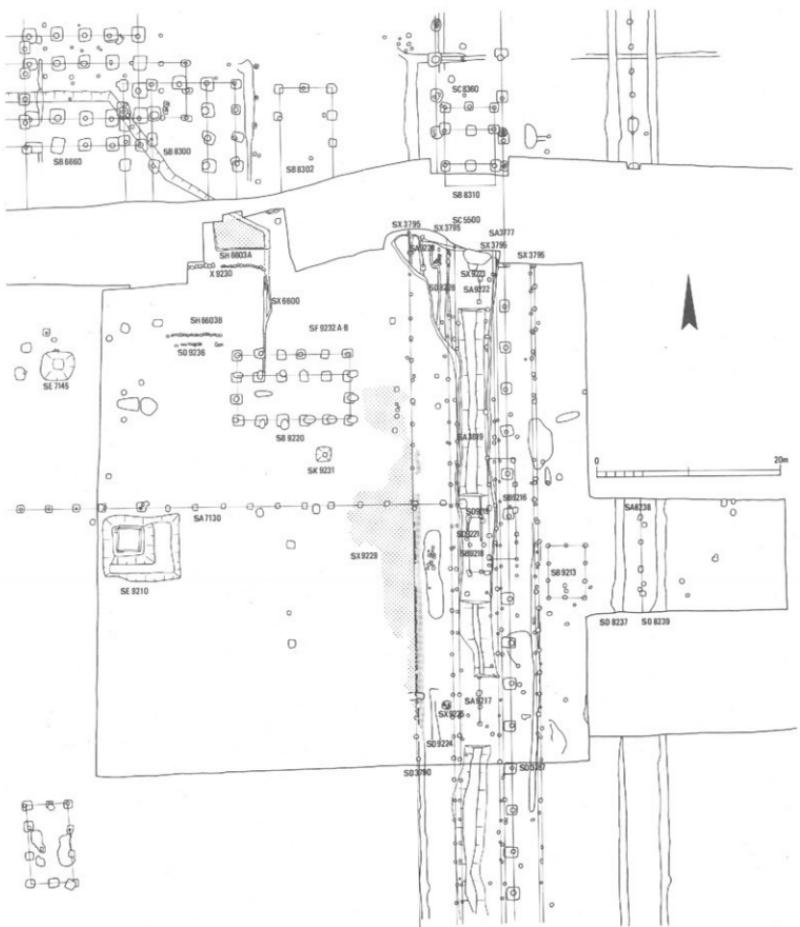
金属器は井戸の抜取穴から鎌が出土した。

木器は井戸から櫛・曲物等が出土した。

木簡はSE9210から1点出土した。長さ27.8cmのしきみの枝を細かく面とりし「道請□□」「道□□」等を記載している。

ま と め

今回の調査で第一次内裏地区東半部の調査は終了し、この地区の全貌をほぼ明らかにすることができた。従来からの調査成果をふまえてこの地区全体を概観し、まとめとする。

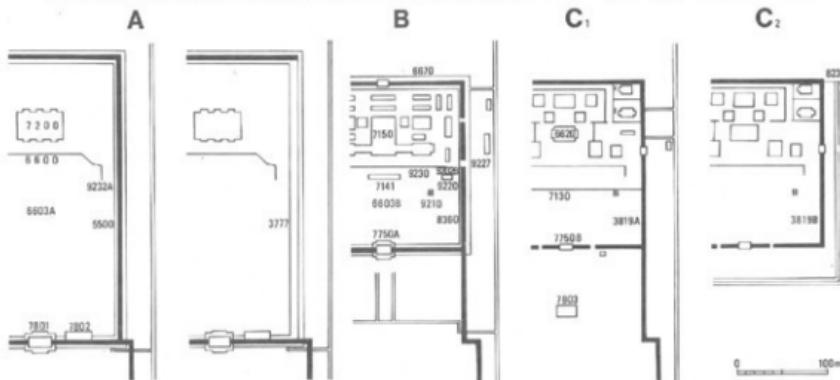


第1図 第117次発掘遺構図

A期（和銅～天平勝宝末年） 南北1080尺、東西600尺の南北に長い区画で画される時期である。南面中央には巨大な門SB7801が建てられる。北から約 $\frac{1}{3}$ の位置に高さ約3mの堆積擁壁SX6600をもつ壇が設けられる。壇は直接築地回廊にとりつかず、両側に約15mの斜道を形成する。壇上には巨大な建物SB7200が建てられる。壇の前面は門まで全面に疊敷広場SH6603Aとなる。広場には井戸SE7145一基が掘削される他には遺構は存在しない。

この地域を区画する築地回廊は梁行24尺に復原でき、柱間は約4.6m等間で東面は68間分に推定しうる。東面の築地回廊は一時塀SA3777に建て替えられる。SA3777は約4.6m等間で67間分ある。塀の柱位置は第27・41次調査での根石の残存状況、足場穴との配列からみて、築地回廊の柱位置の中間にあたる。今回の調査区のはば中央と第87次調査でそれぞれ1間分柱が欠ける場所があり、出入口と考えられる。SA3777は柱位置等、当初の築地回廊に規制されているため、この出入口は当初の築地回廊の門の位置を踏襲したものとも考えられよう。

SA3777は後に廃される。この柱穴を切る暗渠が存在するため、再び築地回廊が構築されたと考えられる。2層ある雨落溝や新旧の足場穴もこれに対応するものであろう。門SB7801の東に、後に樓風建物SB7802が建てられる。なお、今回の調査では当初の基幹排水路SD3765は検出されなかった。削平を受けたとは



第2図 推定第1次内裏地図の変遷

考えられないので、発掘区以南で東折しているものと考えられる。

B期（天平宝字～奈良末） この時期にはA期の区画が南北それぞれ切り縮められ、南北630尺・東西600尺の区画となる。

A期の埴積擁壁を埋めたて南北のほぼ中軸線上に石積擁壁SX9230を構築する。擁壁前面は門SB7750Aまで疊敷広場となる。壇上は正殿SB7150を中心に、10尺方眼で割付けた整然とした殿舎の配置をとる。壇の下には中軸線上に6間×1間の特殊な建物SB7141と、斜道SF9232Bが広場にとりつく位置に構築されたSB9220以外に建物はない。この2棟は北側の柱筋が合う。またSB9220は北庭をもち、壇上の建物群に対する意識が濃厚であり、壇上と壇下の空間利用の違いを示している。石積擁壁SX9230から約30mの位置に井戸SE9210が設けられる。

この時期の区画も築地回廊で、梁行はA期と変わらず12尺である。北面SC6670は根石から43間分想定でき東面SC8360とともに柱間は約4mである。北から11間目に15尺の門があり、北の門から11間目に20尺の門SX9223が想定できる。検出した柱穴は南側だけであるが、石積擁壁を中心をそろえる。この南側には根石の残存は認められない。しかし、SX9223以南は北側と同じ柱間で割り付けると端数が生じる。SX9223を境に北と南で柱間が異なる可能性がある。

C期（奈良末～平安初頭） この時期の区画はB期を踏襲する。この時期は大きく2時期にわけられる。

C₁期には築地回廊が築地に改作され、門SB7750Bの規模が小さくなる。石積擁壁は存続する。壇上の建物配置は大幅に変わる。正殿SB6620を中心に屏による仕切を多用し、内裏的な様相を示す。壇下は依然広場である。南門外には大極殿規模の建物SB7803が建つ。井戸SE9210は存続し、北側は屏で区画される。

C₂期には築地が上墨にかわる。その外側には屏が構築され、二重に区画される。壇上の建物配置はC₁期と変わらない。この時期は、平城遷都時か、平城天皇第三皇子高岳親王に平城旧宮を賜わった時にあたる。SE9210の底から10世紀代の土師器が出土し、井戸枠の抜取穴からは11世紀代の瓦器が出土している。これはこの地域の終焉の時期を示し、水田化された時点を示すものである。

II 推定第一次朝堂院南門の調査（第119次）

推定第一次朝堂院地区はこれまで第27・72・75・77・97・102・111次及び今年度の117次の調査が実施され、この地区的北部及び東側部分での変遷の様相が明らかになってきている。また、これらの調査結果から第一次朝堂院地区の東西幅が720尺に復原されている。一方朱雀門地区については、第16・17次（昭和39年）の調査によって、朱雀門を確認したが、朝堂院の南を限ると考えられる応天門相当位置では門等は存在しないことが明らかになった。

今回の第119次調査は第1次朝堂院南門の検出を目的として行なったものである。中央部を南北に幅2mの溝が流れ、東西には構内道路及びU型溝と6千V高圧電線が通っていた。道路敷は遺存地割から築地の存在が予想されていたところである。調査地区は平城宮跡の調査地区標示で6ABV・6ABWの各C・E地区である。

宮造営以前の旧地表は、調査区（南北約40m、東西約50m）内で北から南へ緩く傾斜しており、約25cmの高低差がある。東西方向は東で約15cm低くなっている、東南隅部分では特に約30cm低い。地山は全体的にシルト又は細砂がベースになっており、西北部分で灰褐色の粘質土が覆っている。この灰褐色粘質土は東へ行くに従い砂質土に変る。また、南東部分では明黄褐色粘土が地山となっているが部分的に暗褐色粘土が覆うところもある。宮の造営に伴い整地が行われるが、全面を覆うような整地は見られず、部分的な整地である。

遺構

今回検出した主要な遺構は、建物4棟・塀6条・溝15条・土塙3基・道路・凝灰岩と埴を用いた施設などである。これらの遺構は6時期に分けることができる。

A期以前 平城宮造営以前の遺構で、下ツ道の東西側溝であるSD1860及びSD1900がある。

SD1860は発掘区東半部中央を流れる南北溝であり、2ヶ所でこれを確認した。幅は南で約1.8m、北で1.3mであり、深さは南で約1.0m、北で約0.4mを測った。遺物は含まれていない。

SD 1900は発掘区西半部中央を流れる南北溝で、3ヶ所で確認、幅は約2.9m、深さは南で約0.6m、北で約0.7mであった。なお、溝底のレベル差は40mの区間で約0.15mであった。調査区内での両溝心々距離は北で24.05m、南で24.9mである。なお、朱雀門地区で検出した両溝心々距離は24.5mである。

A期 平城宮の造営が始められてから、朝堂院南門SB 9200が建設されるまでの時期である。この時期の遺構としてはSA 9199・9201A・9202Aがある。SA 9199の時期とSA 9201A及びSA 9202Aの時期の2小期に分かれる。

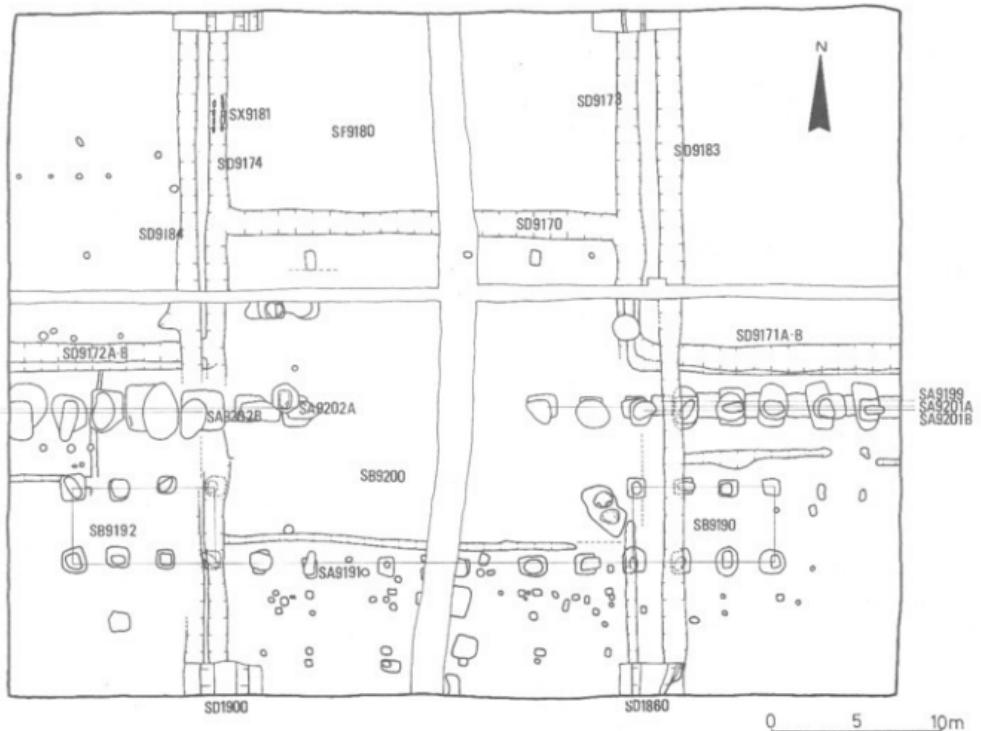
SA 9199は発掘区東部中央で検出した掘立柱東西塀である。9尺等間で5間分を検出した。この柱穴は一辺が1.0m～1.5mのほぼ方形の掘形で、柱痕跡や柱抜取痕跡をもたない。掘形の東西辺は、西端のものを除きすべて次の時期の東西塀SA 9201の柱掘形又は柱抜取痕跡と重複している。深さは1.3mである。このSA 9199はトレチ東端から5間分で終っており、それより西へは延びない。

SA 9201Aは発掘区東部中央で検出した7間以上9尺等間の掘立柱塀で更に東へ延びる。西2間分は門SB 9200の掘込地業下で検出した。柱掘形は長方形から梢円形に近く、長径3mに及ぶものもある。

SA 9202AはSA 9201Aと一連の、朝堂院南北中軸線に対称の位置にある掘立柱塀(9尺等間)である。断ち割り調査でSB 9200の掘込地業下で1間分と次の時期に属するSA 9202Bの柱掘形の底で確認したものである。SA 9201AとSA 9202Aとの間は50尺で、閉塞施設は設けていない。

B期 この時期の遺構は、朝堂院南門であるSB 9200とSA 9201B・9202B及びSF 9180がある。

SB 9200は基壇上に建つ東西棟の礎石建物で、第1次朝堂院地区の南門である。基壇はほとんど削平を受け、根石や礎石据え付け穴、地覆抜取痕跡等は残っていないかったが、掘込地業の範囲を確認することができた。地業規模は東西26.0m、南北16.0mで深さは0.35mである。掘込地業は地山面から掘り込んでおり、深さは比較的浅い。地業は層状に築成していく各層5cm位の厚さである。旧地表のレベルまで築成した段階で拳大の礫を混せて地盤強化の一助としている。



第3図 第119次発掘遺構図

基壇規模はわからないが、掘込地業東縁部で残存基壇版築層の上から3～5番目の層である暗灰褐色粘土層が地業東端から東へ約0.25m延びている。また、地業北縁部では版築層が地業北端から約0.9m南側で切れている。こうしたことから、基壇は東西方向では掘込地業より大きく、南北方向では小さい規模をもっていたと想定できる。門の規模は桁行5間、梁行2間、柱間寸法15尺等間程度の規模と復原できる。なお、土塙SK9196など3つの土塙には4個の礎石が投棄されていた。これらの礎石は各々柱座や地覆座が造り出されていた。

SA9201B・SA9202Bは門SB9200の両側面中央に取り付く東西方向の掘立柱塀である。SA9201Bは5間分以上（9尺等間）を検出した。柱掘形は円形乃至隅丸方形、1辺1.5mの大きさでSA9201Aの柱掘形と重複している。すべて柱抜取痕跡があるが、抜き取る方向に顕著な規則性はない。SA9202Bは4間分（9尺等間）を検出した。この柱掘形は相互に接する程の大きさで抜取痕跡がある。東端の掘形の底に厚さ10cmの長方形の礎板が2枚重ねて置かれていた。

SF9180は朝堂院南門の北側通路敷で直径10cm前後の河原石を敷き並べている。東側は南北溝SD9183付近までのび、西側は南北溝SD9174付近で終る。両端部を明示する施設はないが、後の時期の溝であるSD9183、SD9174で破壊されたのではないかと考えられる。

C期 この時期の遺構には、SA9191、SB9190・9192がある。

SA9191はSB9190・9192の中間をつなぐ7間の掘立柱塀で、両建物の南側柱列と柱筋を揃える。柱間寸法は中央3間が15尺等間、東西各2間は9.5尺等間である。SB9190・SB9192は全く同じ平面規模をもち、桁行3間9.5尺等間、梁行1間15尺の東西棟掘立柱建物である。それぞれの中軸寄りの柱掘形はSB9200の掘込地業と重複している。SA9191、SB9190・9192はその配置等から一体となった施設で、SB9200を撤去した後南側を閉塞している状態である。なおSA9201B、SA9202Bは存続していたものと思われる。

D期 この時期の遺構としてはSD9170・9171・9172・SD9173・9174、SX9181及びSB9205がある。溝の付け替えによって2小期にわかれる。

SD9170は掘立柱塀SA9201の北約11mのところにある東西溝で、SD9173・SD9174と合流する。これらの溝は同時に廃絶される。SD9170は延長約23m、幅2m弱、深さ約0.4mで多量の瓦が投棄されていた。

SD9173A・SD9174Aは南北溝でSA9201及びSA9202の北3mのところで各々東西に曲りSD9171A・SD9172Aになる。SD9173A・SD9174A共に幅約1.2m前後、深さ0.2～0.5mである。

SD9173B・SD9174BはSD9173A・SD9174Aが南に直流するように付け替えられた南北溝で、SD9173は幅約0.4m、SD9174Bは幅約0.8mで深さは共に約0.2mである。SD9170との合流点から南にかけて多量の瓦が投棄されており、SD9174には特に人頭大の河原石及び凝灰岩片が多く投棄されていた。

SD9171A・SD9172Aは南北溝SD9173A・SD9174Aとつながる東西溝で、掘立柱塀SA9201・SA9202の北3mで検出された。既にこれらの掘立柱塀はなくこれに代る施設の痕跡も見付かっていない。しかし第一次朝堂院地区東辺での調査結果からこの時期には築地塀が作られていたと考えられ、SD9171及びSD9172はこの築地塀の北側雨落溝ではないかと考えられる。溝幅は約1.0m、深さ0.3～0.4mである。

SD9171B・SD9172BはSD9171A・SD9172Aを埋め、北へ約0.7mずらした東西溝で幅1.0～1.4m、深さ約0.3mある。埋土には多量の瓦を含んでいた。

SX9181はSD9174とSD9170合流点の北約6mにあり、東西両岸に2.2mにわたって塙と凝灰岩を並べたてたものである。南北両端に塙を立て、中央部に凝灰岩を用い、それぞれ東西相対して大きさをそろえている。性格は不明であるが溝を渡る施設の一部かと思われる。

SB9205はSB9200の跡に建てられたと想定されるひとまわり小さい朝堂院南門である。このSB9205に関連する門や基壇等の遺構は痕跡をとどめていないが、C期のSA9191等の施設は既に廃絶されているのでこの地区に何らかの閉塞施設が必要であり、またこの時期の溝の状況やそれらの溝の埋土に含まれる多量の瓦からみて何らかの構築物の存在が想定される。門の平面構成は桁行5間、梁行2

間、柱間寸法13尺等間で、基壇上に建つ礎石建物を考えることができる。

E期 この時期に属する遺構としてはSD9183・SD9184がある。

SD9183はSD9173の東約2.5mに掘られた幅約1.6m、深さ約0.2mの南北溝である。SD9184はSD9174の西約1.7mに掘られた南北溝で、幅約1.0m、深さは約0.2mである。両溝間の心々距離は約28.3mである。この時期には、門SB9205や築地塀等の施設は廃絶している。

遺 物

瓦塊類は多量に出土したが、主要なものは軒丸瓦106点、軒平瓦123点、鬼瓦5点、面戸瓦8点、熨斗瓦1点などである。軒瓦は平城宮I期の瓦が全体の90%（187点）を占め、II期が14点、III期が6点出土したにすぎない。I期の瓦のうち藤原宮式の瓦は多くの型式にわたっていて、10型式85点が出土した。その他は6284型式と6668型式に限定されていて、それぞれ36点と39点出土した。

出土した瓦のうち、直接遺構に伴って出土したものは93点で、そのうち溝SD9170から38点出土するなどD期の遺構に伴うものが67%63点あり、うち90%がI期の瓦である。鬼瓦はすべて獸身文である。その他の遺物には土器片が若干ある。

ま と め

これまでの調査結果に基づき、第一次朝堂院地区の東西規模は約720尺（215

m）と復原されている。今回の調査の結果、この朝堂院地区の南門SB9200とそれに取り付く掘立柱塀SA9201・SA9202を検出することができた。これによって第77次調査で検出した第一次大極殿と推定されている地区の南面中央門SB7801とこれに取り付く築地回廊SC5600から、SB9200までの南北距離が約960尺（285m）となることが確定した。ここで720尺と960尺を1.2で除すると600

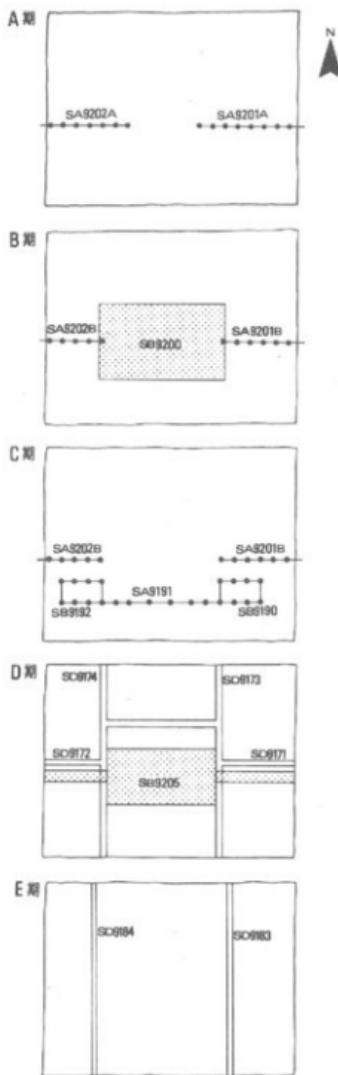


第4図 6284-6668組合せ

尺と800尺という数値が得られることは注目に値する。

今回の調査で朝堂院南門地区では5時期の変遷があり、特に門については中断期をはさんで建て替えられていることが明らかになった。即ち、A期は下ツ道の側溝を埋めた後、掘立柱塀SA9201A・SA9202Aでこの地区を閉塞する。B期はSB9200・SA9201B・SA9202Bが構築されてこの地区が最も整えられる時期である。C期になるとSB9200は破壊され、小さな掘立柱建物2棟とそれをつなぐ塀SA9191で閉塞される時期となる。次いでD期には門SB9205が建てられるが、この門はSB9200よりもひとまわり小さくなる。E期はこの地区の終末期で、幅約28mの間隔を保って南北溝2条が流れるのみとなる。

これらの各時期の絶対年代を決定する資料は得られなかつたが、おおむねA期は8世紀初頭、B期は8世紀前半、C期は8世紀中頃、D期はC期以後奈良時代末まで、E期が9世紀初めの平城上皇の時期に比定することができる。ここでB期の終り、即ちSB9200の廃絶をいつにするかということが問題であるが、B期存続の時期が恭仁遷都の時期に当っていることは充分考慮する必要がある。



第5図 第119次遣柵変遷図

III 東院園池西南地区の調査(第120次)

平城宮跡発掘調査部では、昭和42年度の第44次調査以来東院地区の調査を継続的に行なっており、次第にこの地区的様相が明らかになりつつある。まず従前の調査の成果について概観しておこう。第44次調査においては東院の東南隅に庭園遺構の存在を確認するとともに、大垣・壠地、坊間・条間大路等の条坊関係の遺構についても貴重な資料をえた。

第44次調査地の北接部を対象として行なった昭和51年度の第99次調査では、先に一部検出された園池(SG 5800)の東限・北限を明らかにするとともに、SG 5800に新旧2時期ある事を確認した。今回の調査と直接関連するため、第99次調査で確認された新旧の池の情況について少し詳しく述べておきたい。旧池SG 5800 Aは鍵の手状に伸びる複雑に彎曲する汀線を持ち、岬・入江を配し、池底に沿って扁平な安山岩を、池の中央・岸には部分的に大ぶりの玉石を敷いている。新池SG 5800 Bに比べ深く、岸の立ち上りも急である。新池SG 5800 BはAの形状を踏襲するが汀線まで全面に玉石敷きとし、岬や入江の出入りが大きくなるとともに岸のスロープも緩やかで曲線的な形状になる。北岸には築山を築き、岬や入江にも奇岩を配している。北西岸には池に突き出す建物があり、池の中にも桟敷状の施設を設けて、橋を架ける。出土遺物から、旧池は遅くとも天平年間には既に造られており、新池は勝宝年間頃に改修され、平安時代初期まで存続する事も明らかになっている。

池の北岸地域を対象とした昭和53年度の110次調査では、池に関連する諸施設を検出するとともに、庭園遺構の北限を確認した。この地域は、奈良時代から平安時代初めにかけて9期に及ぶ造替があり、庭園施設や庭園の北限も時期によって変遷する事が明らかにされている。

今回の第120次調査はSG 5800の西南岸と庭園の西限と池西辺部の性格を明らかにするため行ない、合せて南面大垣・壠地・2条条間大路についても従来の成果を補足するために調査した。調査は昭和55年1月8日に開始し、4月17日現在

継続中である。調査面積は約2500m²である。調査地は宇奈多理神社の南で造営以前の地形は神社の鎮座する台地の縁辺部の湿地帯にあたり、地山面は西北が高く、東南に向って緩やかに傾斜する。地山面は灰黒粘土・灰青砂がベースで、この面で古墳時代の溝・ピットを検出している。

遺構

検出した主要な遺構は掘立柱建物11・塀11・溝16・井戸2・池1・通路2である。それらは、層位や重複関係から9時期に分かれる。

A期 東院造営時から庭園造営までの時期である。検出した遺構には、発掘区西辺部の素掘りの南北溝SD29・32・33がある。いずれも地山面に掘られたもので、上層遺構の保存を期し地山まで掘り下げなかつたため流路方向は定かでない。これらの溝は、南面大垣築造以前のもので東西溝SD01Aに合流する。SD01Aは素掘りの南北溝で巾1.0m、深さ約0.5mで南流する。的門周辺で検出されている大垣築造以前の東西塀SA5505は、この溝と時期的には対応するが、大垣基礎断ち割りはまだ行っていないので、両者の関係は詳らかでない。この他、A期の遺構としてはB期の井戸SE12の掘形断面に検出した柱掘形があるが、全容はまだ不明である。2条条間路の北側溝は1回、南側溝は3回の改修があり、A期の側溝巾は定かでないが、2条条間路の幅員は全期間を通じて最大である。後述するが、A期は非常に長い期間にわたっており更に細分できる可能性がある。

B期 東面大垣の西約70mの地点に南北溝SD04を配し、東方の庭園遺構を区画する。SD04は側と底に河原石を用いる玉石溝で、幅0.5m、深さ0.3mある。SD04は南面大垣SA5505の雨落溝SD01Bにとり付く。SD01Bも同様な玉石溝であるが、側石・底石は部分的にしか残存しない。SD04の西約4mの位置に3×4間の北庇付東西棟SB13がある。SB13は桁行・梁行とも10尺等間、妻柱列に南北方向の廊SA24・25がとり付く。SA24は3間で終り、SA25は4間分検出した。いずれも10尺等間である。SB13の南約2mには東西に長い矩形の井戸SE12があり、井戸の内法は、長辺5.7m、短辺2.6m、深さ0.7m、掘形は、長辺6.7m、短辺4.1mを測る。井戸枠は、1段しか残っていないが、厚さ約3cm、幅

約15cm、長さ3.0mで、井戸としては比較的薄い板を使用し、長辺は2枚の板をつないでいる。S E 11の埋土からは平城宮第Ⅲ期の瓦6282・6721が多量出土し、B期の年代の一端がうかがえる。南面大垣S A 5505は残りが悪く、東辺部に若干基壇土を残す程度であるが、部分的に断ち割りを行ない掘り込み地業を確認した。SA 5505の北雨落溝SD 01は、北辺の造替と対応し、3回改修されており、時期によって南北に移動する。南雨落溝SD 43は残りが悪く一部でしか検出できなかつたが、北雨落溝と異なり、全時期を通じてほぼ一定した位置にあると考えられるB期のSA 5505の基壇幅は、両雨落溝の心々距離から20尺に、築地基底巾は一部で残った寄せ柱据え付け痕跡から7尺に復原できる。従前の調査の成果から、旧池SG 5800 AがB期に併行する事はほぼまちがいない。SG 5800 Aは、上層池保存のため数ヶ所に小トレンチを入れて確認し、貴重な資料を得た。SG 5800 Aの掘形は地山から掘られ、西岸では掘形底線よりやひかえて石積擁壁を築き、裏込として礫・粘土を詰めている。北岸及び南岸の一部の状況は、西岸とは様相を異にする。特に北岸では、緩やかなスロープを作り、比較的大きな玉石を敷きつめている。このスロープは西岸の石積擁壁を埋めたてて作られている。また池の南半部でも99次調査結果と同様、扁平な花崗岩を敷いた底面が検出されたが、底石は掘形の上の盛土面に敷かれている。両岸とも石積擁壁の基底部とスロープから連なる底面とはレベル的に一致しない。以上のような状況から旧池が更に2時期に分れるのか部分的な改修なのか、それとも造営の手順の差か、あるいは同一時期で当初から意図された岸の化粧の差なのか、現在確定しがたい状況にある。池の西岸部の汀線の状況は中央に半島が突き出す程度で比較的単調である。今回の調査で旧池SG 5800 Aの西南隅には第44次調査で検出した玉石を敷く屈曲する流杯渠SD 5850が取り付く事を確認した。また西南隅には、雨落溝に取り付く平城宮造営方位に合う南北溝SD 02も検出した。両者とも池の排水に関係するが、流杯渠は公式行事に、SD 02は常時の排水に使用されたと考えることができよう。

C期 B期のSD 04のすぐ西と、それから西に16.8m(56尺)離れた位置に2条掘立柱南北溝SA 06・SA 22を建て、東と西を区画し、中に2×4間東西棟

S B 16を配す。S A 06は15間分、S A 22は13間分を検出した。両者ともに柱間は10尺等間でそれぞれ西側に玉石を敷いた雨落溝 S D 08・S D 23をともなう。S D 08は、S A 5505の部分では暗渠となり、雨落溝に合流する。S B 16は、桁行・梁間ともに9尺等間で、北に雨落溝 S D 17を伴う。南面大垣 S A 5505にくぐり門 S B 40 Aを設け、その北に目隠塀 S A 09を設ける。S B 40 Aは柱間15尺(4.5m)、SA 09は3間で10尺等間。S A 5505の北雨落溝はA期のS D 01 Bを踏襲する。

D期 基本的にはC期と同様な配置であるが、C期の南北塀 S A 06・雨落溝 S D 08、S B 40を踏襲する一方で、S B 16をとりこわし西側の南北塀を2mほど東にずらし、新たにS A 20 Aと玉石組の雨落溝 S D 21を設け、目隠塀 S A 09を建て替えS A 10を配す。S A 20 A・S A 10ともに10尺等間。S G 5800 Aはこの時期まで続くと考えられる。

E期 E期に移ると様相が一変する。調査区全面がバラス敷きとなり、前代のS A 06の位置に造営方位より西に北で約3度ほど偏する南北塀 S A 05と雨落溝 S D 03を設ける。S A 20 Aの西約8.4mに新たに南北塀 S A 28を設ける。S A 28は11間で終り、更に東に折れS A 15となり、S A 05に取り付く。3条の塀で閉まれた内部は、なんらの施設もなく広場として利用されたのであろう。S A 28の南端には2×2間の総柱建物があり、S A 28は妻柱に取り付く。S A 15にはS D 26、S A 15にはS D 14の玉石溝が付隨する。この時期の雨落溝はいずれも側に玉石を立て底には砂利を敷いたものである。S D 26はS B 27に規制され、一旦東に折れ、側柱に沿って南流する。S A 05は10尺等間、S A 15・S A 28は8尺等間、S B 27は桁行8尺、桁行8尺・10尺である。S A 15の南面、S A 28の東面のバラスには、柱筋に直交する方向に約10cm幅の目地を入れてある。目地の延長は、S D 14の南、S D 26の東のバラス面でも検出したが、性格については不明である。前述したすべての建物掘形はバラスを敷く以前に掘られている。この時期の南面大垣 S A 5505も改修された可能性が強いが、その方位と雨落溝については定かでない。池西辺のバラス面と新池 S G 5800 Bのバラスとは一連のもので、上層池の造営と西辺部の造営が規を一にして行なわれた事を物語る。S G 5800 Bは基本的にはAの形

状を踏襲するが、汀線は A より広がり岸から底面にかけての傾斜は緩くなる。半島部も粘土を貼り付けて拡張し、半島の周辺及び池尻には奇岩を加えている。今回の調査で S G 5800 B の全容が判明し、先の調査成果と合わせて南北最大巾 60m、東西最大巾 60m、総面積 1520m² にも及ぶ事が明らかになった。

E 期の改作は室外にも及び、2 条条間路南側溝を約 3 m 程北に移し、(S D 41 B)、条間大路の幅員をせばめている。S D 41 B は巾約 4.5 m を測る。

F 期 E 期の S A 05・S D 03 を踏襲するが、西辺にあった南北塀 S A 28 を東に約 8.1 m ずらし (S A 20 B)、北辺の東西塀も北に約 8.4 m ずらし S A 18 を設け、南北に長い区画を作っている。S A 20 B 西約 5 m 隔てて 3 × 7 間の東庇付東西棟 S B 30 を配す。S A 20 B と S B 30 のほぼ中間に玉石溝 S D 23 B が配されている。S A 18・S A 20 B は 10 尺等間、S B 30 は 8 尺等間で、掘形は小さく、西側柱列の一部に残る柱根も直径 15cm に満たない (F 期は E 期と次に述べる G 期の過渡的な様相を示す建物配置をとっている)。

G 期 東面大垣の西約 70 m の位置に南北塀 S A 07、さらに西に 13.5 m 隔てて南北塀 S A 20 C を配し、南面大垣 S A 5505 にくぐり門 S B 40 B を開く。S A 20 C の西約 5 m の位置に 3 × 7 間の西庇付南北棟 S B 31 を配す。S A 07 と S A 20 C の中心線は、南面大垣長を 3 等分したうちの西から $\frac{2}{3}$ の地点にあたる。2 条の南北塀の南端掘形は、一部で検出した大垣の寄せ柱の穴と接するほど大垣に密着して掘られる。S A 07・S A 20 C には抜取穴はなく、柱根が残り、東院廃絶までこの塀が機能していた事を物語る。両者ともに 10 尺等間で、S A 07 は 15 間分、S A 20 C は 13 間分検出した。S B 31 は、2 条の塀と柱筋を揃え、造営が極めて計画的に行なわれた事実を示す。身舎は桁行・梁行ともに 10 尺等間、庇は桁行 10 尺等間、梁間 14 尺、門 S B 20 B の柱間は 15 尺である。

G 期の改作は室外にも及び、2 条条間大路の北側溝を南に約 3 m 程ずらし (SD 5200 B)、壠地部分を拡張し、側溝に接して東西塀 S A 38、その北に南庇付東西棟 S B 39 を配す。S A 38 は 7 尺等間で、西から 6 間目と 7 間目には柱穴がない。S B 39 は 桁行・梁行ともに 8 尺等間。2 条条間大路南側溝は、溝心は移動しないが

幅をせばめ S D 41 C となる。S D 5200 B は幅約 3 m、S D 41 C は幅約 2.5 m を測り、両者とも右で護岸している。S D 5200 B の岸に沿って護岸の杭列もあり、改修の可能性も考えられる。G 期以前の S D 5200 A 出土木簡から北側溝の改修の時期は天平 12 年以降に想定される。両側溝の心々距離は約 17 m を測る。

H 期 H 期の配置は G 期の配置をほぼ踏襲するが、G 期の 2 条の南北塀で囲んだ空間に建物が配され、この空間地が通路として意識されなくなった段階と考えられる。S B 40 B の北に 1 × 4 間の東西棟 S B 11 が、北方に 2 × 5 間の南北棟 S B 19 が建ち、発掘区西辺には 2 × 4 間の南北棟 S B 34・S B 34 を切る南北棟 S B 35 がある。いずれも柱間が狭く小規模な建物で、S B 11 は桁行 7 尺・梁間 9 尺等間、S B 19 は桁行 8 尺・梁間 7 尺等間、S B 34 は 2 間目と 3 間目の間に間仕切りがあり、桁行・梁間ともに 6 尺等間、S B 35 は梁行は不明であるが、桁行 7 間で 10 尺等間である。塁地部分では、S B 39 をほぼ同じ位置で同規模に建て替えている (S B 39 B)。

I 期 I 期は奈良末以降の時期で、床土を排土した段階で検出された瓦をならべた溝、玉石を敷いた溝、礎石の根石風の石の集積等があるが、後世の攪乱が著しく、遺構配置は定かでない。塁地部分には、2 × 3 間の細い柱根を持つ方位の振れた南北棟 S B 37 と、柱間の揃わない同じく方位の振れた東西塀 S A 36 がある。2 条条間路南側溝はさらに北に移る (S D 41 D)。S D 41 D の底面には小さな土塗があり、その中から奈良末・平安初期の土師器が出上している。塁地部分の S E 42 は径約 5 m 深さ約 6 m 程の円形の掘形をもつ井戸で、井戸枠は全部抜き取られていたが、堆積土中に鎌倉～室町時代の漆器の椀が出土した。

次に各期の年代について記す。B 期の S B 13 の柱抜取穴から、Ⅲ 期（天平 17 年～天平勝宝年間）の軒丸瓦 6282 が、S E 12 の下層堆積からⅡ 期（養老 5 年～天平 17 年）の軒瓦 6225・6663 が、井戸の埋土からⅢ 期の軒瓦 6282・6721 が多量に出土している。B 期は天平年間を中心とした時期に比定される。E 期の柱抜取穴からⅢ 期の軒瓦が、また E 期以降の柱掘形からⅢ 期の軒瓦が出土している。E 期の建物配置が前代とはまったく様相を異にする事、また新池がこの時期に造替される

事を考えれば、E期の造営は平城遷都後の造営と規を一にした可能性がきわめて強い。

遺 物

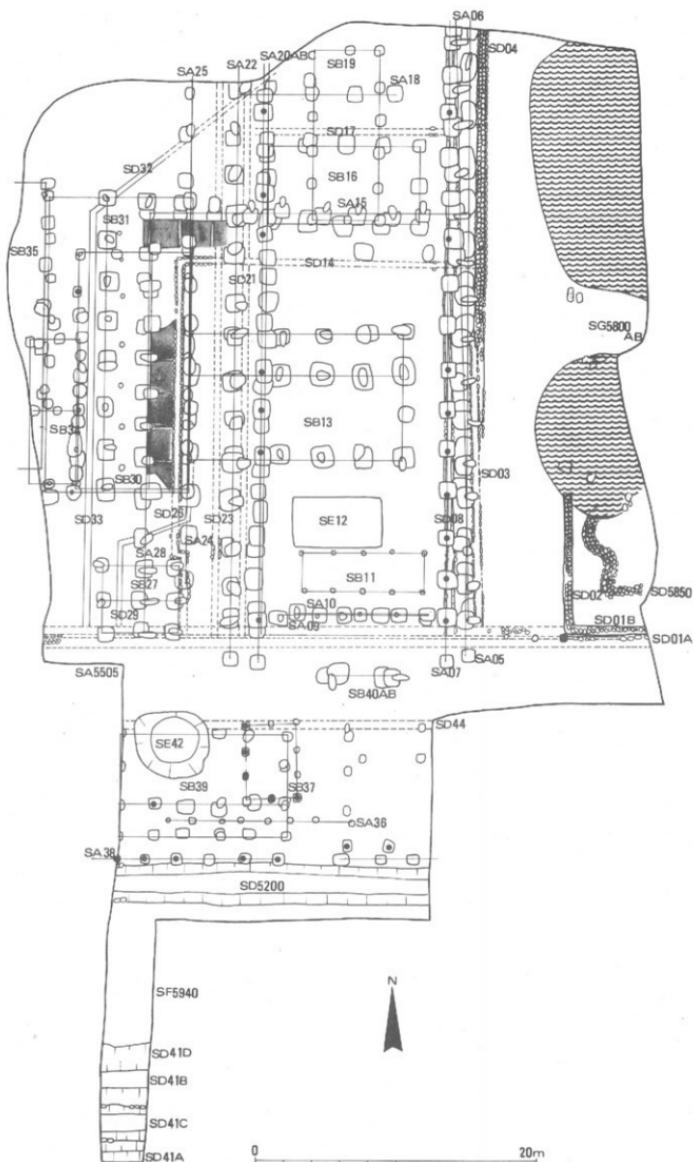
現在調査中であり、遺物の整理も十分行なっていないので、簡単な記述にとどめ、追って年報等で述べることとする。

木簡 4月17日現在出土した木簡の総数は19点であり、多くは2条条間路の北側溝 S D 5200から出土したものもある。S D 5200 Aの木簡は保存状態が良好で、北側溝の改修の年代を判断できるものであり、この他、S G 5800 Aの石積擁壁の裏込めから2点出土している。代表的なものをここに報告する。

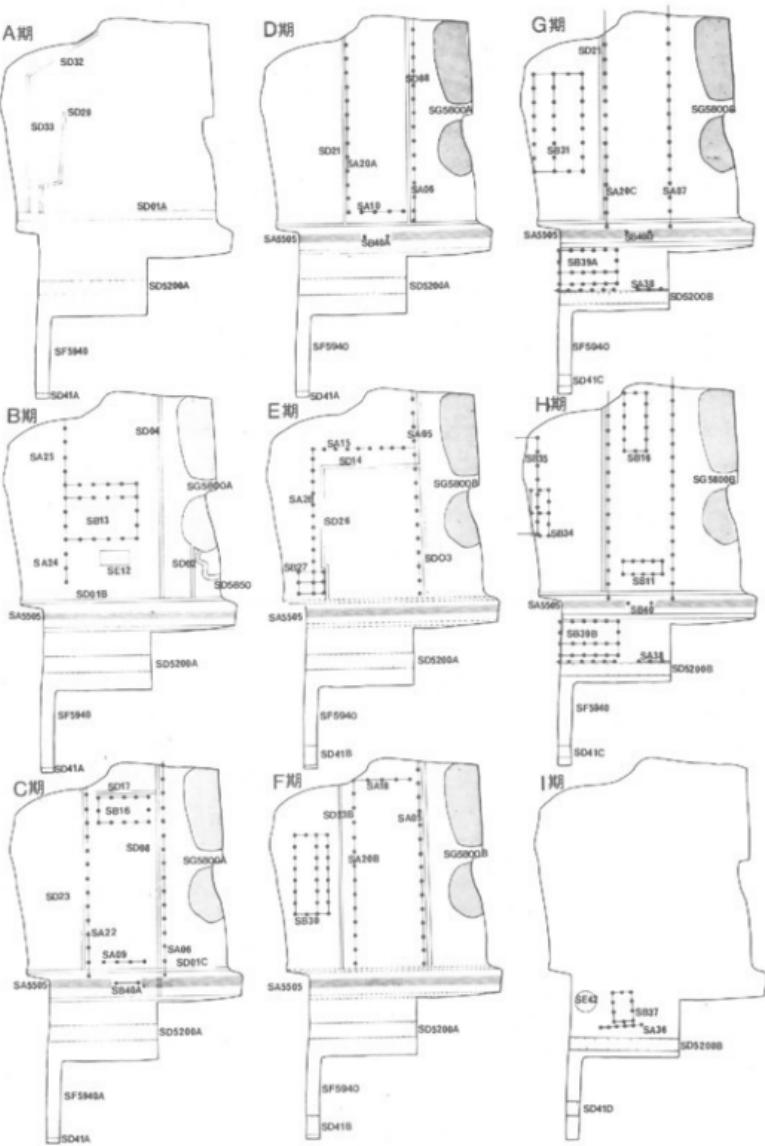
- 後國安那郡山野郷川上里 (表) S D 5200 A出土
- 矢田マ甲努三斗 右肅米六斗 (裏)
- 矢田マ本身三斗
- □□□ (表) "
- 養老五年九月廿□ (裏)
- □□屋^(吹き)ニ_{底ニ} 釘百八十 (表) S G 5800 A出土
- □ 合釘千九百五十六 (裏)

ま と め

今回の調査の結果、池及び庭園遺構の西限が確認され、新旧両池に関しても新しい知見を得た。特に旧池に関しては、2時期に分かれる可能性もあり、今後、飛鳥奈良時代庭園史上の中での旧池 S G 5800 Aの占める位置が問題となろう。池西辺部に関しては9期以上の造替があるが、庭園の西限については各時期ともほぼ一定した位置にあり、池北岸の状況とは様相を異にする。また各時期とも庭園遺構の西限の一画に塀で区画を作っており、この区画は庭園との関連から検討されねばならない。この区画の性格の変遷は、大きく次の4期に分れる。庭園の維持管理施設が作られる時期(B・C期)、周囲を塀でとり開んだ広場となる時期(E・F期)、通路となる時期、再び維持管理施設が作られる時期(H期)に分かれる。
(4月17日記)



第6図 第120次発掘構図



第7図 第120次構造変遷図

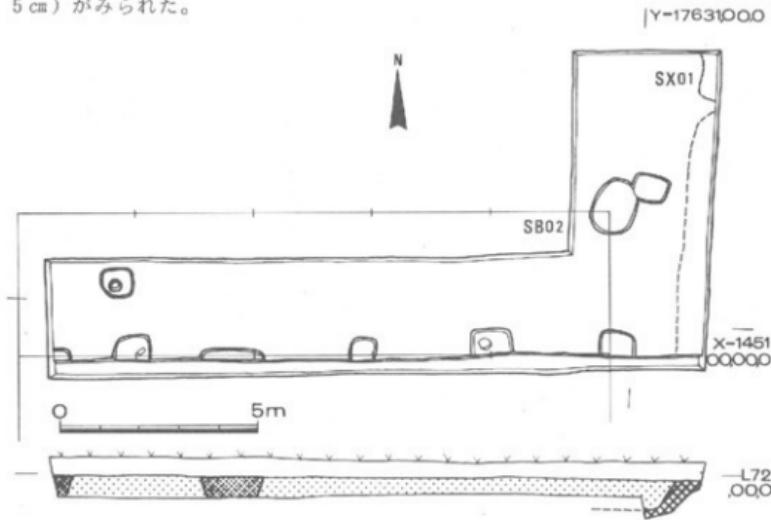
IV 平城京の調査

① 左京一条二坊十五坪の調査（第118－4次）

民家の新築に伴う事前調査である。遺跡はコナベ古墳と法華寺の中間にあたる平坦な丘陵上にあり、対象地域の中央に東西方向のトレンチ（ $18 \times 3\text{ m}$ ）を設定して調査を行なった。

奈良時代の遺構として掘込み地業 S X01・掘立柱建物 S B02を検出した。遺構検出面は黄灰色粘質土の上面で、その下には同じく自然層の黄色粘土が厚く堆積する。奈良時代の遺構は全体に削平が著しい。

S X01は自然層を掘り込んだ地業である。東辺を約 8 m ほど確認しただけで、掘形の全形は不明である。地業の深さは、検出面から約 0.7 m 。地業内の埋土は下より1含礫褐色白色粘質土、2含礫灰白色粘質土、3含礫黃褐色粘質土がほぼ水平に堆積する。トレンチ北部では掘形が屈曲し、底面に土器類を含む炭層（層厚約 5 cm ）がみられた。



第8図 第118－4次発掘遺構平面・断面図

S B 02は、トレンチ南辺で礎石據付け掘形6ヶ所を検出した。拡張区で掘形1ヶ所をさらに検出したので、トレンチ南辺の柱穴は東西棟礎石建物の、北の入側柱筋にあたるものと考えられる。平面形式5間×4間、桁行10尺等間、庇の出は12~13尺と推定。前記S X 01はこのS B 02に伴う地業ともみられ、S B 02は基壇建物であった可能性がある。しかし、建物方位が平城京の造営方位とずれており、また調査面積が狭いので、復原に関しては今後の検討を要する。

遺物はS X 01の底面から須恵器（杯A・B、皿、甕、平瓶）、土師器（杯C、椀、甕）が出土した。いずれも平城宮土器編年のⅢ期にあたる。

② 左京三条一坊十五坪の調査（第118~8次）

調査地は左京三条一坊十五坪の西端で、東一坊大路の西側溝の存在が予測された。調査は東西40m、南北24mのトレンチをし字形に設定しておこなった。

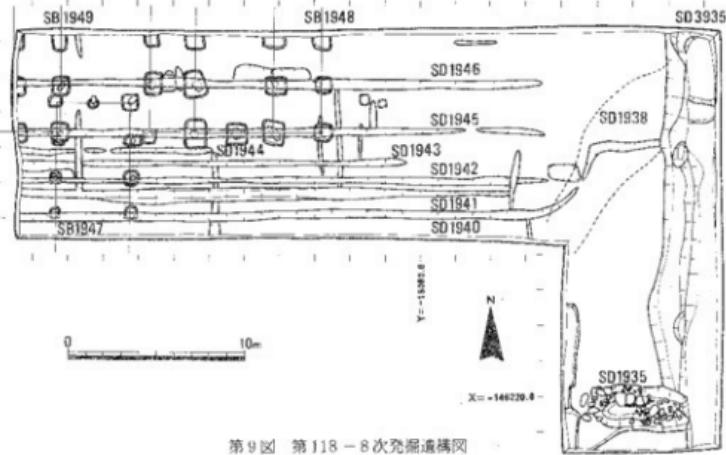
調査区の土層堆積状況は、水田面上に造成されていた盛上の下に水田耕土および床土があり、その下に遺物包含層である褐色砂質土が20~40cmの厚さに堆積していた。奈良時代の遺構はその下の地山面で検出した。

調査の結果、掘立柱建物3・土塹7・溝12・旧河川1を検出した。S B 1948は桁行3間以上、梁行4間、東西庇付き南北棟で、調査区外に続く。柱間寸法は桁行9尺等間、梁行は身舎が7.5尺、庇が9尺である。S B 1949は調査区の西端に部分的に検出したにすぎないが、S B 9148と併存する。庇付きであろう。S D 1947は桁行4間以上、梁行2間の南北棟で、柱間寸法は7尺等間である。柱掘形の重複関係から、建物はS B 1947~S B 1948・1949の2時期に区分できる。S D 1940~1946およびそれらに交差する数本の溝はいずれも幅30~50cm、深さ20cm前後の細溝で、埋土中には8世紀の上器片・瓦片を含む。うちS D 1940の埋土には焼土・鉱滓・凝灰岩切石片を含んでいた。S D 3935は東一坊大路の西側溝で、調査区内では推定される溝幅の約3分の2（3~4m）を検出した。溝埋土は上下2層に分かれ、上層は9世紀代の土器片がわずかに出土したが、土器の大部分は奈良時代末期（平城宮V）に属し、長岡京時期（平城京VI）のものをわずかに含む。

また調査区北端のやや深くなった溝底から18点の木簡が出土した。SD1935はSD3935に流入する石組みの東西溝である。この位置には坪内と大路とを限る築地の存在が想定されるので、SD1935は築地下を潜る暗渠と思われる。なおこの暗渠は十五坪の中軸線上に位置している。SD1938は平城京造営以前の自然流路である。

遺物には瓦塼類・土器・木簡などがある。瓦塼類は鬼瓦・軒瓦・丸瓦・平瓦・埠である。軒瓦はSD1935・1941・1943・1946から出土し、軒丸瓦が13点、軒平瓦が37点ある。SD1941からは鬼瓦1点と埠10数点が出土している。土器はSD3935・1941から出土した多量の土師器、須恵器がある。SD3935上層からは黒色土器が、SD3935の西岸に部分的に堆積した砂層からは瓦器が、いずれも数点出土し、またSD3935下層出土の多量の土器の中には2・3点の製塩土器片がみとめられた。木簡は18点ある。すべて破片あるいは削り屑で、「丹波国□上郡□」、「丹波国 縦部□」、「雜賀」などの内容がみられる。

その他の遺物としてSD3935下層から和同開珎の銅錢が1点出土している。同層からは木炭・桧皮・桃・栗・梅の種核の他、馬骨が1個体分埋土中に横たわった状態で出土した。



第9図 第118-8次発掘遺構図

③ 左京三条一坊八坪の調査（第118—22次）

調査地は、平城宮跡に南接する北新大池の池底部である。調査は、奈良市が北新池の東の堤上を通る市道の拡幅を計画し、その事前調査として実施した。調査地の状況と道路拡幅の工法から、調査の目的を二条大路の南北側溝の位置を確認することにおいていた。

二条大路の側溝と築地塀は、二条大路と東一坊大路の部分で一部を検出している（平城宮第32次調査）。また宮の西方では、西南隅地域の調査の際に、約10mの壠地をへだてた位置で宮の外堀、すなわち二条大路北側溝を確認している（平城宮第14次調査）。従って、この両側溝の西側延長線上に、南北に長いトレンチを2ヶ所に設定した。このトレンチは、漏水防止のため、堤に貼った粘土層をさけて設定したので不整形となっている。

A トレンチ 南北約12m、東西1mのトレンチを設け、大路の南側溝（S D 4006）を検出。溝幅は肩の部分で3.5m、底で2mを測る。溝内の堆積層は数層にわかれ、若干の木器片と多量の瓦片が落ちこんでいた。軒瓦は6711A型式の軒平瓦4点、軒丸瓦は6225L・6275D・6316C型式などがある。溝の南側は搅乱があり、そのためか築地塀の痕跡は見い出せなかった。

B トレンチ 大路の北側溝の推定位置に南北7mのトレンチを設けたが、溝としての何らの痕跡も見い出せなかった。そこで、側溝の位置が南北いずれかに振れている可能性を考え、それぞれの方向にトレンチを延長したが、側溝の痕跡を見い出すことはできなかった。

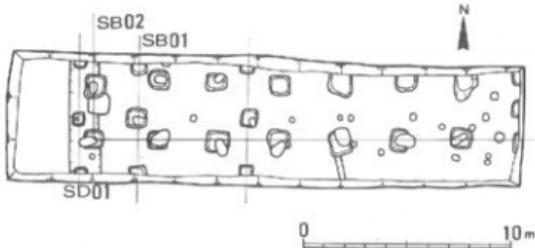
以上の調査成果をまとめると、二条大路の側溝は、南側溝（S D 4006）を推定位置に検出したが、北側溝（S D 1250）は推定位置に検出できなかったという結果になる。しかし、二条大路北側溝は宮の外堀を兼ねる重要な機能をもつものである。今回の調査は小規模なトレンチを設定しての調査であるので、早急な結論はさけねばならず、今後の調査をまちたい。

④ 左京三条二坊二坪の調査（第118-15次）

本調査は東詰 ファミリー・レストラン建設予定地の事前調査である。調査は東西25m、南北6mのトレンチを設定して進めた。

検出した遺構は東西棟建物1棟、南北棟建物1棟、南北溝1条である。東西棟建物（SB02）は庇の部分の柱穴2列を検出し、7間分を確認した。身舎が調査区の南北いずれに位置するかは不明である。しかし、南側柱が南に抜き取られた痕跡を示すことから、身舎は検出した庇の北側に想定することが可能である。桁行・梁行ともに柱間10尺で、柱掘形は約1m四方ある。7間あるいはそれ以上の大規模な東西棟建物である。なお、この建物には足場穴と考えられる小柱穴が伴う。南北棟建物（SB01）は2間分を検出し、西側に庇をもつ。桁行・梁行ともに柱間9尺で、柱掘形は約70cm四方ある。南北棟建物（SB01）と東西棟建物（SB02）は柱穴の切り合い関係はないが、土層の観察から南北棟建物が一層上から切りこんどおり、東西棟建物が古い。南北溝（SD01）（幅1.5m深さ0.1m）は坪の東西約東3分線上にある。この溝の埋土は東西棟、南北棟建物のいずれの柱穴も覆っていることから検出遺構中最も新しい。東西棟（SB02）→南北棟（SB01）→南北溝（SD01）の順に3期の変遷が考えられる。なお、遺物は土器片・瓦片が若干出土したのみである。

検出遺構は二坪のほぼ南北2分線、東西は東3分線上に位置し、大規模な東西棟建物を配している。隣接する六坪の庭園遺構や七坪の建物群を考え合わせると、この坪も大きく宅地割りした高級住宅地だったことが類推できよう。



第10図 第118-15次発掘遺構図

⑤ 左京三条二坊七坪の調査（第118次～23次）

本調査はマンション建設に伴う事前調査である。調査は南北トレンチ（ $18 \times 5 m$ ）と東西トレンチ（ $14 \times 5 m$ ）を設定して進めた。当該地は左京三条二坊七坪東南隅にあたり、一部二坊坊間路にかかる地点である。

遺構は二坊坊間路西側溝・柱穴1・土塀1である。坊間路西側溝（SD01）は幅約 $2.5 m$ 、深さ $0.9 m$ 、堆積土は大きく2層に分れる。上層は黒色粘土層、下層は灰色砂質土で、遺物は主として上層から出土した。

出土遺物には多量の木製品・木簡・土器・瓦などがある。木製品は木刀1点・儀仗用の弓4点・人形1点・削り掛け14点・曲物・木蓋などのほか多数の加工材が出土した。木簡は上層から18点、下層から1点出土した。上層出土の「手枕里戸主无得津君千嶋一石」の付札木簡が完形品のほか、他は断片である。土器は平城宮I・II期（8C前半）の上師器・須恵器が主体で、「主水司」「造少乃古」と記した墨書き土器も出土した。瓦類は軒丸瓦1点のみである。

今回は二坊坊間路の西側溝の検出にとどまったが、83・86次調査、112～13次調査の成果から坊間路の幅員を推定できる。すなわち、二坊坊間路をはさむ両側の南北小路心（c・d）が判明していることから、坊間路推定心（b）を求めることが可能である。この推定心から西側溝心（a）の距離は約 $4.9 m$ となり、その倍数約 9.8



第11図 第118～23次発掘遺構図

mが幅員となる。従来坊間路は大路規模に推定されているが、今回の二坊坊間路幅員は3丈強となり、小路（2丈）の幅員に近い。二坊坊間路の幅員については今後の調査の進展をまって検討しなければならない課題であろう。

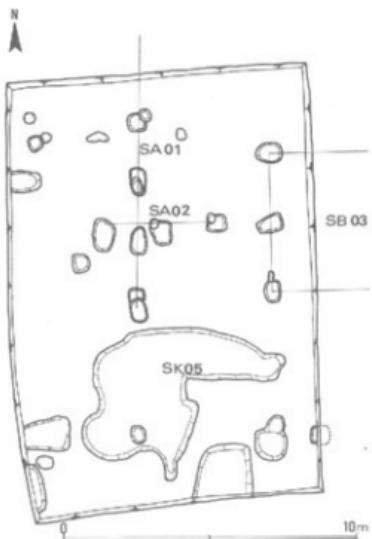
⑥ 左京六条一坊十坪の調査（第118-16次）

今回の調査は、まると工業株式会社の資材置場建設に伴う事前調査として実施した。調査は、予定地の一画を東西10.5m、南北15mの範囲で行った。検出した遺構は、古墳時代の土塙2、奈良時代の掘立柱建物1、掘立柱塀などである。

奈良時代の遺構 a・bの2期に分れる。a期には南北塀SA01と建物SB03がある。SA01は、発掘区のほぼ中央で4間分を検出。柱間は2.1m(7尺)等間。主軸方位は北で東に約1度振れる。SB03は東西棟建物の西妻部分。柱間は2.4m(8尺)間である。b期には東西塀SA02がある。2間の塀で、柱間は2.1m(7尺)間、柱は抜き取っている。

古墳時代の遺構 不整形土塙SK04・05がこの時期の遺構である。一部を調査したのに留まったが、内部から布留式の壺の破片が出土した。

まとめ 調査地点は十坪の東西の中心に近いところであるが、発掘面積が小さく、検出遺構が坪内部でいかなる位置をしめるのか不詳である。このうち、南北



塀SA01は10坪内部を東西に区画する施設の可能性があるので検討しておこう。平城京の条坊の調査は、六条付近ではあまり進行していない。そこで、岸俊男氏が、現存地割から想定した各坊の規模（岸俊男『遺存地割・地名による平城京の復原調査』1974）をもとに、先年調査した朱雀大路の位置を基準に割りつけた。この手続きによって得られた十坪の想定の東西中軸線は、SA01の位置から西約13mの位置にある。

第12図 第118-16次発掘遺構図

(7) 羅城門跡の調査（第118-26次）

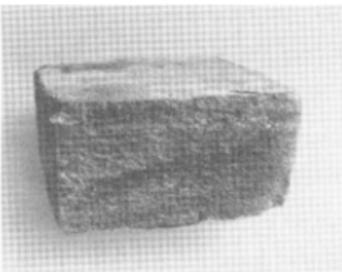
佐保川災害復旧工事の一環として、大和郡山市所在の来生橋北側の西堤防に工事が及ぶこととなった。この地点は平城京羅城門跡にあたり、昭和44年から47年にかけての3次にわたる発掘調査によって堤防の西斜面以西において羅城門の基壇西端部が検出されていた。また、昭和10年岸熊吉によって、来生橋南北の所々において4個の礎石が落ち込んでいることが確認されていた。

建設省近畿地方建設局大和工事事務所・奈良県教育委員会および奈良国立文化財研究所の3者は協議のうえ事前に発掘調査を実施することとし、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が調査を担当した。

西堤防東斜面下半部延長約35mとそれに対応する川底を川幅の約 $\frac{1}{3}$ にわたって発掘することとし、工事のための矢板櫓を調査に援用、水をくみあげて川底の調査の準備をおこなう一方、昭和55年1月18日、斜面の調査を開始した。斜面中ほどに幅1m内外の平坦面があり、この位置がかつて検出した門基壇上面のレベルとはほぼ等しいことから、この平坦面の上部1mを含め以下を川底にむかって掘り始めた。表土を除去したところ、全体に玉石練石張りが現われ、検討の結果、これは昭和10年頃の河川改修工事によるものとの事実が判明した。再び協議の結果、この部分の調査は実施しないことにした。

川底の調査では、遺構の残存は認められず、調査区内に存在が予想された3個の礎石のうち1個だけを検出することができた。この1個は川底の砂の中に埋まり、1角のみを水中に現わしていた。1月30日、重機によりこの礎石を取りあげ、調査を終了した。

後日の調査によると、この礎石は岸氏撮影のうちの1個にあたり（大和郡山市教育委員会『平城京羅城門跡発掘調査報告』1972 fig 1の左写真）、溶結凝灰岩製、長辺118cm、短辺100cm、厚67cmを測る。



第13図 羅城門礎石

⑧ 右京一条二坊西一坊大路の調査 2 (第 118-29 次)

奈良市二条町 1 丁目地内の駐車場造成にともなう事前調査である。調査地は平城京右京一条二坊一坪・二坪に該当し、西一坊大路西側溝および一坪と二坪との坪境い小路の検出が予想された。

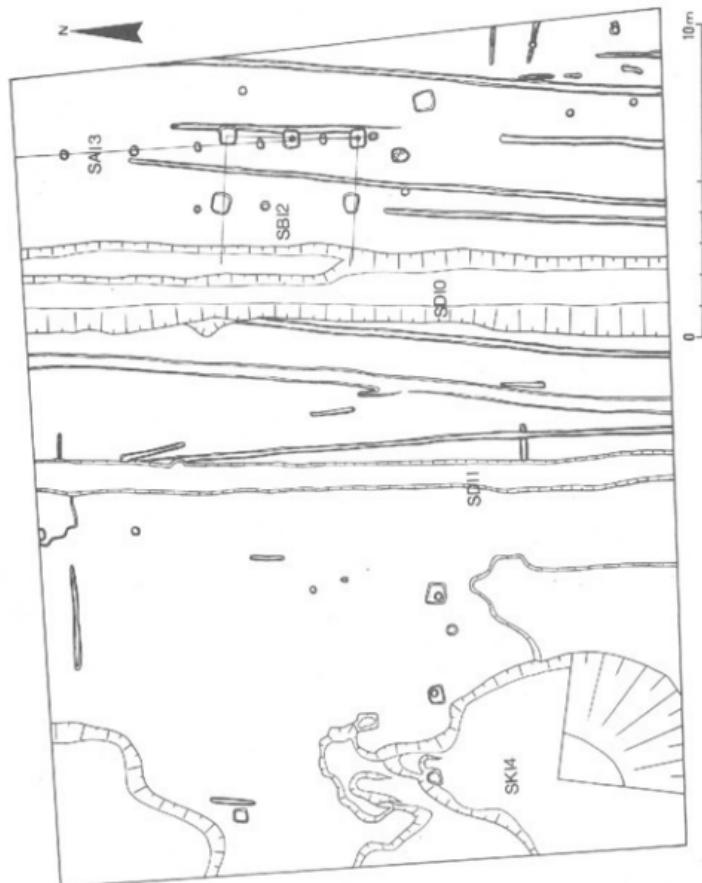
調査は南地区と北地区とに分けて行なった。南調査区では水田耕土・床上の下に近世遺物を若干含む 2 ~ 3 層の粘質土が堆積し、現地表から 0.5 m で遺構面に達した。遺構検出は暗茶褐色粘質土面で行なった。検出した遺構は掘立柱建物 (S B12)・塀 (S A13)・土塀 (S K14) および多数の溝である。

検出した溝のうち細い斜行溝は中世以降の耕作にともなうものであるが、S D 10 と S D 11 とは南北に走り、溝内には古墳時代の土器や奈良時代の瓦・上器を多く含むので、奈良時代の溝であると判断できる。S D 10 は幅 2.3 m ~ 3.0 m、深さ 0.6 m の溝である。調査区の北半部では溝の東肩は二段になる。これは第 103 - 104 次調査で検出し西一坊大路西側溝と考えた溝の北延長上に位置する。溝幅は今回検出した部分がやや広くなっているが、やはり西一坊大路側溝と考えられよう。とすれば、大路幅は溝心々で 8 丈となる。S D 11 は幅 0.9 ~ 1.1 m、深さ 0.2 m で、S D 10 の西 6 m (溝心々距離 2 丈) の位置にある。S D 10 と S D 11 との間は黄色粘土を積んでおり、これを築地の痕跡とするならば、S D 11 は垣の内側の雨落溝に推定できる。S B 12 は西一坊大路路面上にあり、西端は大路西側溝にかかり 2 × 2 間に推定できる。柱の根固めに瓦を用いており、西一坊大路廃絶後の建物と思われる。S A 13 も西一坊大路路面上にありやや西にふれている。S K 14 は奈良時代の大土塀で深さ 1.5 m である。

北調査区は、地表から 0.6 m で遺構面に達し、層位は南調査区と同様である。ここでは縦横に細い溝が走るが、出土遺物が少なく、重複関係からも坪境い小路の側溝は確定できなかった。ただし、S D 15 は第 103 - 7 次調査で右京一条二坊の一坪と二坪との坪境い小路の北側溝に推定された溝の真東延長上に当たる。同調査では幅員 2 丈で南側溝を推定したが、今回はその延長上に溝は検出できなかつた。今後の調査をまたねばならない。

⑨ 右京一条二坊西一坊大路の調査 2 (第118-31次)

奈良国立文化財研究所新庁舎排水溝にかかる公共下水道工事に伴う事前調査である。奈良市二条町2丁目に改修される同研究所庁舎の東側は平城京西一坊大路に相当し、第103-14次調査によってその東西両側溝を含め大路の位置は確認済みであった。そこで下水管埋設に際しては、大路側溝をさけるべく路面敷部分を調査した。検出遺構は西一坊大路路面と近世の溝数本および土塙1である。



第14図 第118-25次発掘遺構図

⑩ 右京五条二坊五坪の調査（第118－1次）

調査地は唐招提寺の南方約100mの地点で、平城京右京五条二坊五坪の北辺にあたる。当初、今回の調査区北辺に五坪と六坪の坪境小路を想定していたが、調査の結果調査区全体が北側に流れる大納言川の氾濫による搅乱を受けており、坪境小路を検出することができなかった。

検出した主要な遺構は井戸1基、幅の狭い旧流路跡1条である。

調査地の土層は、耕作土・床上の下に厚さ約20cmにわたって灰白色及び黒色砂層が何層も堆積しており、調査全体が大納言川の氾濫原であったことを示す。調査区の中央やや南よりで検出した東西に帶状にのびる旧流路は広い部分で幅2m、最深0.8mで、流れによるえぐりも隨所に見受けられた。調査区の南辺では、旧流路に隣接して木組みの井戸1基を検出した。この井戸は流路の廃絶後に設けられたものである。井戸の東側には部分的に径15cm内外の石が階段状につまれてお

り、洗い場としての施設と考えられた。井戸枠は内のりが約90cmで、四隅の角柱にみぞを掘りこみ、これに横板を上から落しておむ。横板の幅はいづれも一定せず、また各辺は12~13枚ある。深さ約3.5mである。なお井戸の埋土からは平安時代の須恵器・羽釜・皿・瓦片等が出土した。



第15図 第118－1次検出井戸

⑪ 右京五条二坊十四坪の調査（第118－12次）

唐招提寺の南西、右京五条二坊十四坪及び五条々間大路南側溝の推定位置で、家屋の改築にともなう事前調査をおこなった。調査は南北トレンチ(12×2m)を設定して進めた。土層は、耕土・床下に中・近世の遺物包含層である暗褐色砂質土(約30cm)があり、その下で灰白シルトないし淡褐色砂の地山となる。

主要な遺構は掘立柱建物1(SB01)、溝2(SD02・03)で、他に土塙がある。SB01は南北2間(8尺等間)を検出したにすぎず、南北棟か東西棟か明らか

でない。柱掘形は一辺約1.0mであるが、深さ0.2mとかなり削平されている。SD02は東西溝で、北肩が発掘区外になる。幅3.0m以上、深さ約0.8m。埋土は2層あり、ともに中・近世の遺物を含む。SD03はSD02に注ぐ南北溝で、中・近世の遺物が出土している。

上塙は中・近世のもので、この中には瓦・石をすえて礎板としているものもあるが、建物にはまとまらない。

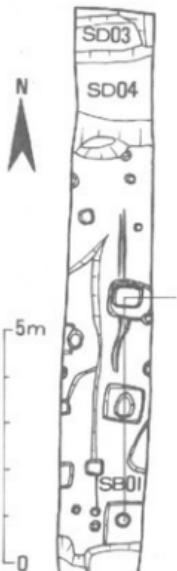
遺物には中・近世の瓦器・灯明皿・瓦類がありこのほかに少量の奈良時代の土器・瓦が出土した。

昭和51年度に唐招提寺東南でおこなった第98-14次調査において、五条々間大路北側溝を検出している。北側溝は近世まで改修されながら存続したと考えた。今回検出した東西溝SD02は、北側溝と心々で約12m（4丈）南に位置する。SD02は北側溝と同様に近世に至るまで改修・存続した五条々間大路南側溝と考えていいであろう。SB02は柱筋が平城京の造営方位にほぼあい、右京五条二坊十四坪内の建物群の一部になると考えられる。

⑫ 右京七条一坊十五坪の調査（第118-5次）

薬師寺の東南約300m、県道木津郡山線の東際での、店舗新築工事に伴う事前調査である。調査は東西トレンチを2ヶ所（14×4m、3.5×2m）設定して進めた。土層は、耕作上・床土の下に褐色の砂質土が約60cm堆積し、その直下に黄灰色粘質土がある。遺構検出はこの上面で行なった。

検出した主要な遺構は掘立柱南北棟建物1棟と西一坊大路東側溝である。掘立柱建物は梁行2間（7尺等間）で、桁行は西側で1間分（7尺）検出したのみである。一坊大路東側溝は東の肩部を検出したにとどまったためその幅、深さともに明らかでない。



第16図 第118-12次
発掘遺構図

⑬ 称徳天皇御山荘推定地の調査（第118－2次・20次）

調査地は奈良市西大寺町の市立伏見中学校の北側に残る海拔高87～94mほどの丘陵裾部にある。隣接する池は長辺60m 短辺20mで中島を有している。西大寺蔵の伽藍絵図にはこの付近は称徳天皇御山荘とされ同様な池が描かれていることから、その有力な推定地とされている。また平城京北辺四坊の三坪・六坪にわたり、坪境小路等の存在も予想された。池の東・南側で相続いで4件の宅地造成あるいは住宅新築の現状変更申請が提出され、昭和54年4月と11月の2回に分けて延べ5本のトレンチを設けて 99 m²を発掘調査した。

遺構 池の東側は現在農道によってせき止められ、この農道の東側でA・Bトレンチを設けた。Aトレンチでは、現地表下約1.3mの地山面で南北に走る池岸を検出した。池の深さは約20cm。池中には底に厚さ約5cmの砂礫層があり、その上に厚さ約15cmの茶色をした植物腐植層が堆積していた。池岸には人工的な護岸は設けられておらず、緩斜面となっている。Bトレンチではやはり植物腐植層が全体に及んでおり、トレンチ全体が池の中にあたることが判明した。

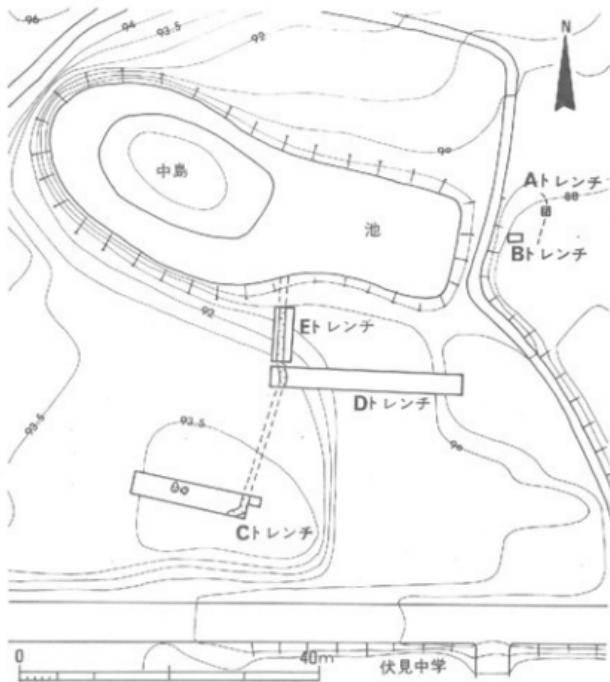
池の南側は南西から北東へ下る斜面となっている。C・D・Eトレンチでは一連の南北溝一条のはかに土塙二基を検出した。溝は素掘りで、やや屈曲しながら南から北へ向って池に流れ込む。幅は最大1.7m、深さ40cmほどである。Cトレンチでは地表下30cmほどで地山面となり溝を検出したが、D・Eトレンチでは地表下約1.0mで地山面となり、この上の黄灰褐砂質土層上面で溝を検出した。

遺物 Aトレンチでは、池の東岸の地山直上で須恵器円面鏡1点、池内堆積層で土師器甕1点が出土した。円面鏡は陸部の周囲に低い小突起を巡らせ、海部と区画したもので、脚には長方形の透しがある。奈良時代後半に属するものである。甕は体部の小破片で内外をハケメによって調整したもので、奈良時代前半の可能性が高い。他のトレンチでは、池内堆積土や溝理土中から少量の中世土師器片が出土している。また、奈良時代の平瓦平と埴輪片各1点が出土した。

まとめ A・Bトレンチでは池およびその東岸を確認し、池が現在より約10m東に広がっていたことが判明した。また出土遺物からみて少なくとも奈良時代に

は池がすでに存在していたことが明らかとなった。池岸には人工的な護岸を施しておらず、地山面を浅く掘り込んだものであった。したがって池は仮に人工的に造られたものとしても、旧地形を利用して簡単に手を加えた程度であったと考えられる。池の南岸は現在も侵蝕が進んでおり岸が当初より広がっているものと思われた。南側で検出した南北溝は遺物からみて中世の一時期に存在したものであり、古代の遺構は検出できなかった。

以上のように池が奈良時代から存続していることを確認する大きな成果を得たが、これに関連する施設の確認はできず、称徳天皇御山荘との積極的な関連を見出すには至らなかった。なお今後の調査が待たれる。



第17図 第118-2・20次発掘遺構図

V 寺院の調査

① 薬師寺境内の調査

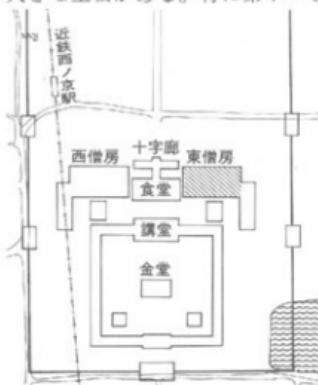
発掘調査は東僧房の再建工事に先立ち、その復原資料を得ることを目的として行なった。

薬師寺東僧房については昭和45年に薬師寺発掘調査団（団長杉山信三氏）が基壇南縁の全長55mと第1房を明らかにし、東僧房の位置・規模および房の各間取がほぼ確定している。今回はその発掘区を含めて大房第1房から第9房までの東西棟の全面発掘を行なった。ただし東僧房のまわりには集水管がめぐらされており、東僧房の雨落溝を含め広く調査することができないため建物の部分のみ調査を行なった。

東僧房付近の地山は灰色粘質土で、西側は一部砂質土である。この付近は昭和のはじめ頃まで水田であり、耕作土・床土の下には黄色褐色土がある。耕作土の上には薬師寺境内の整地による盛土が厚さ70cm近くある。

遺構の保存状態は第1房と第2房は良好で、第3房以東はきわめて悪い。礎石はすべて抜きとられ、基壇上面は削平を受け、さらに平安末から中世にかけての大きな土塙がある。特に第7～9房には土塙が多数あり、基壇はほとんど残らない。第7房の南北溝は近世以降のもの、第9房の南北溝は中世の溝である。このような後世の破壊にもかかわらず、礎石据付掘形・根石・地覆石抜き取り痕跡により、大房第1房から第6房までが明らかになった。

大房の基壇は砂質土と粘質土を互層に約60cm積んでいる。基壇南端には人頭大の玉石や玉石抜取り痕跡の残存から、基壇は玉石数個を積み上げた玉石積基壇となろう。しかし大房基壇北端には葛石はない。南側基壇の出は南側柱心か



第18図 発掘位置図

ら 2.1 m である。第 7 房の南の調査では、南側の雨落溝は南岸も玉石積みで幅 1.2 m、深さ 0.4 m である。

この基壇上で東西に並ぶ礎石据付掘形を検出し、東僧房は東西に長い建物で、各房はそれぞれ間仕切られていることが判明した。

各房の房境柱の礎石据付掘形は方形で一辺が約 1.5 m、深さが最も深い第 1 房北西の掘形で約 0.6 m ある。第 1 房の礎石据付掘形の底には瓦を敷いている。特に妻柱の礎石据付掘形からは瓦が多量に出土した。これに対して部屋の内部を間仕切る柱の礎石据付掘形は方形で一辺が 1 m、深さ約 0.2 m でやや小さい。方立柱礎石据付掘形は円形で直径 0.6 m、深さ約 0.2 m である。一方大房北側の建物の南側柱礎石据付掘形は方形で一辺約 1 m、深さ 0.3 m である。

大房（第 1 房から第 9 房）は東西に長い建物で食堂と棟心をそろえ、西僧房とほぼ対称の位置に配置している。大房一房分の規模は梁行が 4 間（9 尺 + 10 尺 + 10 尺 + 9 尺）、桁行が 2 間（10 尺 + 10 尺）であり、隣りの房とは壁で仕切っている。各房は梁行 20 尺の身舎と前後 9 尺の庇部分からなり、大きく前・中・後の 3 室に分けられる。内部は土間床である。第 1 ・ 第 2 房の正面には凝灰岩の地覆石が 20 尺の間口を引通しており、中間に礎石据付掘形は存在しない。地覆石の内側に接して中央部分 7.5 尺にわたって凝灰岩を並べており、両側に袖壁を設け、中央を開口部としていたらしい。最も保存状態のよい地覆石は長さ 80 cm、幅 15 cm、高さ 17 cm である。外に面している地覆石の外面は上端から 10 cm 位までは風化が著しく、それ以下はあまり風化していないことより、約 10 cm 位は地上に出ていたことを示している。この地覆石は一部後の補修の際に小さな凝灰岩や花崗岩とさしかえている。中室の正面には礎石据付掘形が 2 個所にあり、3 間にわりつけ、中央間を扉口としているらしい。背面には中央に礎石据付掘形があり、2 間にわりつけており、西側には地覆に用いた瓦の抜取り痕跡、東側には中央より東 7 尺に円形の礎石据付掘形がある。この掘形は方立柱礎石据付用のものであると考えられるところより、西の間は壁、東の間は東端 3 尺を壁、残り 7 尺を後室への扉口としているようである。第 1 ・ 第 2 房の中室には西および東寄りにそれぞれ小さな穴が並

んでおり、この穴は東石の抜き取り痕跡と考えられる。この穴の一部は床が削平されたり、礎石が抜き取られた時になくなっているが、西僧房と同様に西側に床を東側に棚を設置していたのであろう。第3房以東は上間が削平されており、東石の配置は不明である。後室は2室に分けられ、東側は背面に扉口や壁の痕跡はなく、開放しとなっていたようである。

大房の北側柱心から2.4m北には各房ごとに西側柱筋を大房の房塙いにそろえた1間の礎石据付掘形がある。これは西僧房と同様に、南北棟（桁行3間-8尺等間。梁行1間、8尺）の付属屋南側柱位置にあたる。また付属屋の南側柱列にそろえて、その東側には浅い落ち込みがあるが、これもし字形石敷溝の南側の掘形にあたるであろう。

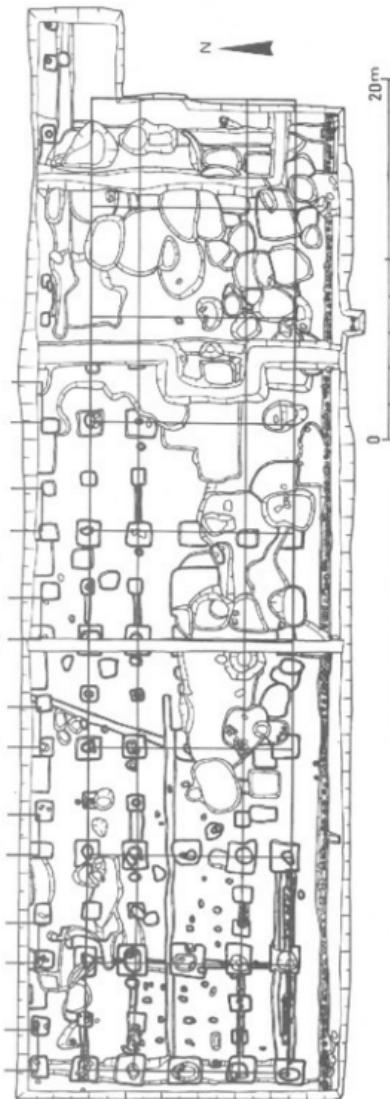
発掘区の中央部で基壇の築成法を調べたところ、この付属屋の南側柱礎石据付掘形の下層で素掘りの東西溝（幅0.8m、深さ0.4m）を検出し、さらに東西3箇所でこの溝の続きを確認した。この東西溝から大房北側柱までの距離（2.1m）は人房南側柱から南雨落溝までの距離とほぼ同じであり、またこの両溝の深さもほぼ同じであることより、この東西溝は人房の北雨落溝と考えられた。

以上の発掘調査の結果により、東僧房は西僧房と全く同じ規模・間取であり、各房は桁行20尺、梁行20尺の身舎と前後9尺の底部分からなり、前・中・後の3室に分けられ、隣りの房とは壁で仕切られていること、また創建当初には付属屋は存在しなかったことが明らかとなった。東僧房創建の時期については、第1房の梁行側柱および房塙いの柱の礎石据付掘形の底に敷いてあった新しい瓦（軒丸瓦6304-Eが1点、軒平瓦6664-Oが6点）は平城宮軒瓦編年の第Ⅱ期にあたることから、養老5年から天平17年頃であろうと考えられる。一方東僧房の廃絶の時期については、昭和45年東僧房発掘調査において、第1房の土間は赤く焼けており、木炭・焼上が散乱していることより、東僧房は焼失したものと考えられた。また第1房の床面より土器が重なって焼け落ちた状態で出土しており、これらの上器の年代は10世紀後半頃と考えられるので、東僧房の焼失は長和4年（1015）に撰述された『薬師寺縁起』に記載されている天禄4年（973）の食殿堂童子宿

所からの出火による僧房焼失の記載とも矛盾しない。つまり東僧房は天禄4年に焼失し、以後今回の発掘区においては再建されていないことが明らかとなった。

東僧房の遺構とは別に発掘区の北東で東僧房の焼失後に掘られた掘立柱掘形を検出したが、その性格は今回の調査では明らかにすることができなかった。

出土遺物には瓦・土器・錢貨がある。瓦はおもに南雨落溝・土塙・礎石据付掘形の底から出土した。軒丸瓦は130点・軒平瓦は159点である。礎石据付掘形から出土した軒丸瓦は6276型式2点・6304-E型式9点で、軒平瓦は6641型式6点・6664-O型式1点・6682-A型式1点である。この中で6276型式・6641・6682-A型式は平城宮瓦編年第I期で、6304-E・6664-O型式は第II期である。土塙中から出土した軒瓦には中世の瓦もいくつか含まれる。土器はおもに土塙中より出土した。特に第4房の大土塙からは200点にものぼる12世紀末の土師器皿や瓦器碗・皿が一括投棄された状態で出土した。この



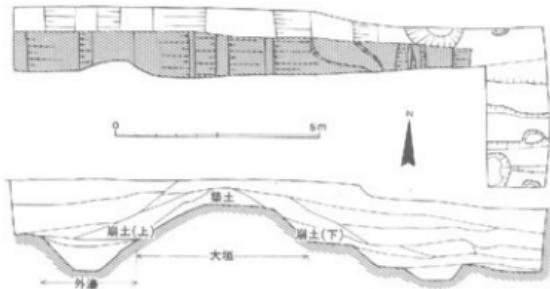
第19図 梅林寺東僧房発掘遺構図

他に須恵器が1点・縁軸陶器・灰釉陶器が2点出土している。第8房の土塙から青磁皿が1点出土した。錢貨は第6房の土塙から富寿神宝が5枚重なって出土した。

② 薬師寺西面大垣の調査（第118-27次）

住宅新築に伴う事前調査である。当該地北方の竹藪などには築地の痕跡と思われる土壌状の高まりがところどころに残り、それらの延長線上にあたるところから、薬師寺の西面を画する大垣遺構の存在が想定された。設定したトレンチは、東西に長く（ $10 \times 2 m$ ）、東端で逆L字形に南へ3m拡張した。

調査の結果、推定どおりの位置で築地大垣状遺構を検出した。大垣は地山を削り出した上にきめの細かな土をつき固めたもので、基壇幅5.25m、残存高1.3m（うち地山のみの高さ0.75m）ある。大垣西外方には幅2.35m、深さ0.8mの空堀が接する。東方は平坦面が続いていたものと思われるが、現状は幅1.1mほどしか残らず、削平を受けている。平坦面の上に築地崩壟土が2層堆積していた。下層崩壟土の上面に雨落溝状の石だまりがあり、本薬師寺式の軒瓦・瓦器・羽釜などを含んでいた。下層崩壟土をならして用いた面の時期は中世に属する。大垣積み土内にも瓦器・羽釜片が含まれており、中世に大垣の修築がおこなわれたことが考えられる。



第20図 薬師寺西面大垣発掘遺構平面・断面図

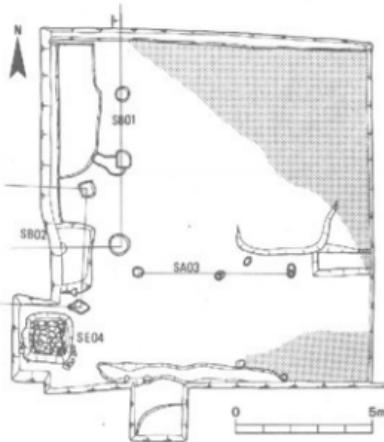
③ 東大寺境内の調査 1

東大寺学園体育馆の改築に伴う事前調査である。調査地は、南大門を入ってすぐ西側にあり、南面築地に沿った地域である。調査は東西約37m、南北約18mのトレンチを設置してすすめた。

調査地は現地表から約40cm下までは盛土層である。トレンチの東 $\frac{2}{3}$ では、盛土層の下に人頭大から50cm以上の大きさの石を含む礫層がある。礫層は、西 $\frac{1}{3}$ あたりより西方へいくに従い下がっていき、トレンチ西端での層序は、盛土層下に黒褐色包含土、暗褐色混礫土、黄褐色粘質砂土の順になっている。礫層の露出する東 $\frac{2}{3}$ には遺構はなく、西 $\frac{1}{3}$ の12×12.5mについて精査した。黒褐色包含土には瓦器が含まれるが、暗褐色混礫土中には含まれていなかった。暗褐色混礫土を除去し、黄褐色粘質砂土上面で遺構検出した。

検出した遺構は、掘立柱建物2棟、柵1、井戸1、土塹2ほかである。2棟の掘立柱建物は、いずれもトレンチ西寄りからはじまりトレンチ外へのびるもので、建物規模は不明である。2棟の建物の南に接して井戸がある。井戸は、一辺約1.8mの方形の掘形をもつ。深さは遺構面より1.8mで、20~30cm大的河原石を敷き、その上に細バラスを5cm程の厚さで敷いていた。側壁は方形の石組であったと思われるが、最下段の一段のみ辛うじて残っていた。四隅では、長さ50cm、一辺5cmの角材を斜にわたし、その上に側石をおいていた。

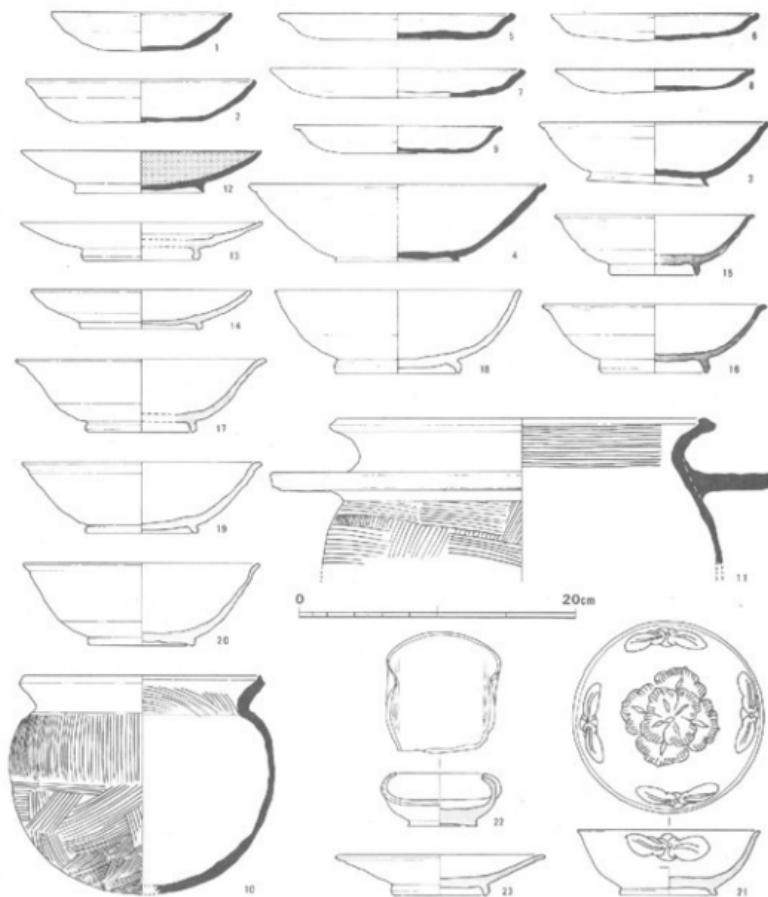
井戸は廃絶時に一気に埋められているが、上端から1m下までの埋土には、多量の土器類が含まれていた(第19図)。土師器杯A(1・2)、杯B(3・4)、皿A(5~9)、甕A(10)、羽釜(11)、黒色土器A類皿(12)、B類甕、須恵



第21図 東大寺西南院発掘遺構

器杯・壺、綠釉陶器碗（19・20）、灰釉陶器皿（13・14）、椀（15～18）などである。他に瓦類・曲物・種子・墨片なども出土した。

土器の年代から井戸の廃絶時期は10世紀前半とみられる。包含層から出土した遺物には綠釉陶器（21・22）、灰釉陶器（23）をはじめとする土器類・軒丸瓦・軒



第22図 出土土器(1~20 SE 04出土, 21~23 包含層出土)

平瓦・丸瓦・平瓦・鬼瓦・文字瓦・三彩面戸瓦がある。

軒平瓦6732は新種である（第20図）。

＜東大寺西南院について＞ 今回の調査区は、江戸

時代の『寺中寺外懸絵図』によると新禪院の東端にあ



第23図 出土軒平瓦

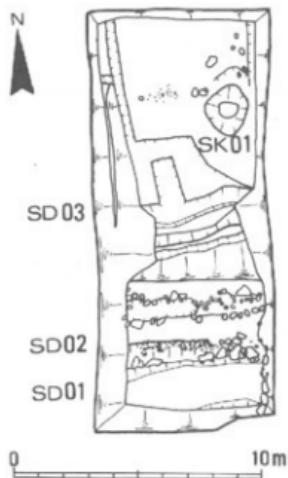
たる。新禪院は鎌倉時代中頃（文永）の建立と伝えられるもので、それ以前がどの子院にあたっていたか不明である。同絵図では南大門西側の築地より南一帯を「西南院殿屋敷今ハ田畠」としている。西南院屋敷地はこの絵図では南面大垣より北へは及んでいない。ところが一方南大門をはさんで対称の位置にある東南院はやはり大部分畠になっているが、薬師堂一字が描かれていてその敷地は南面大垣の内側に創立され、のちに大垣外にまで拡大したとみることができる。恐らく西南院も当初は大垣内に創立されたものと思われる。ちなみに『要録』・『続要録』によれば、西南院は鎮護国家のために天平神護年中に創立された古い格式の高い子院であるが、その後倒壊したままで年を経、弘長・文永頃に再建の運びになったという。ただこの再建記事は新禪院（新院）の創立記事と内容が重なり、しかも矛盾している。つまり新禪院の記事では西南院の旧地に建てたと記し、逆に西南院の記事では新院の旧地に建てたと記しているのである。

しかし遺構の年代観からみて今調査区は西南院の一部とみるのが最も妥当であろう。本来の西南院は築地内側にあり、のちに新禪院にその敷地を吸収されたのである。

④ 東大寺境内の調査 2

本調査は東大寺が僧坊推定地に北接して建設する祭器庫予定地の事前調査である。調査にあたっては南北トレンチ（ $17 \times 6 m$ ）を設定して発掘した。当該地は江戸時代初期の『東大寺寺中寺外懸絵図』にみられる塔頭金蔵院にあたる。

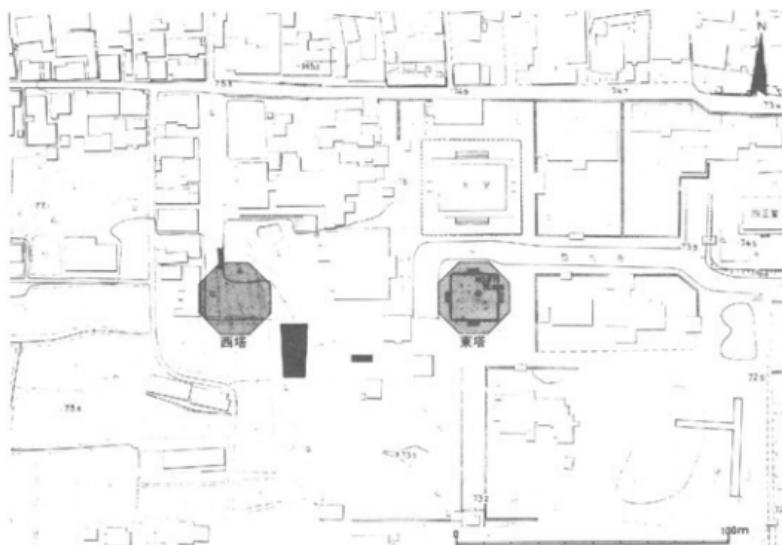
検出した遺構は石組の東西溝2条、旧河川1条、土塙1である。トレンチ南端で検出した石組東西溝（S D 01）は幅約3m、深さ70cmの幹線水路とみられる。出土遺物から判断して鎌倉時代以降のものである。この溝を整地した後、その北側約1.5



第24図 東大寺僧房北発掘遺構図

mに石組の南北溝(S D 02)がつくられる。溝幅は約60cmで両岸に人頭大の自然石を列べる。近世の塔頭金蔵院に伴う遺構であろう。上塙(SK 01)は南端の東西溝(S D 01)と同時期である。旧河川(S D 03)はトレンチのほぼ中央、厚い整地土(約2m)の下で検出した。この河川は東から西へ流れる。埋土中より多量の丸平瓦とともに東大寺創建軒瓦や土師器・須恵器・綠釉・白磁・瓦器などが出土した。

今回検出した遺構は、直接僧坊跡に関連するものではなかったが、僧坊の北限をトレンチ南端で検出した幹線の東西溝SD 01以南に求めることが可能となった。



第25図 西大寺発掘調査位置図 ■ 発掘区

⑤ 西大寺境内の調査

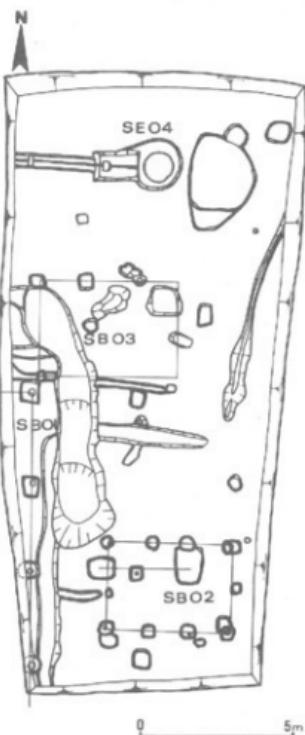
今回の調査は、現西大寺が西塔跡の南に接して信徒会館の建設を計画し、その事前調査として実施したものである。調査地は、信徒会館予定地と、この建設に伴って移動する護摩堂の予定地の2カ所である。なお、調査の過程で、基礎地盤の高さを確認するため西塔跡の一部を発掘した。

信徒会館予定地　調査以前の地形は、西塔の付近から現寺域の西南隅にかけてやや尾根状の高まりがある。調査によって、この地がかかつて水田化していたこと、この尾根状の高まりは、近世以降に水田を埋立てた結果生じたものであることが判明した。東西約10m、南北約20mの調査区で検出した遺構は、奈良時代の掘立柱建物3、掘立柱塀2、江戸から明治時代にかけての井戸跡と取水施設などである。

奈良時代の遺構　a・bの2期に分れる。

a期　S B01は、南北棟建物の東側柱列にあると考える。3間分を検出。柱間は3m(10尺)等間。S A05は1間の掘立柱東西塀。柱間は3m(10尺)である。b期　S B02・03は、小さな柱掘形の3間×2間の東西棟建物。後世の削平のため、柱穴の底の一部がわずかに残る程度である。S B02の柱間は、桁行方向が1.3m等間、梁間は1.5m等間。S B03の柱間は桁行・梁間とも1.5m等間に復原できる。

近世以降の遺構　層位と遺物からみて、中世以降この地は水田化していた。井戸S E04と取水施設は、この水田を埋立てた後に設けられている。S E04は、竹のタガをまわした樋を井戸枠に使用。竹のタガのみが遺存していた。取水



第26図 西大寺発掘遺構図

施設は、竹を導水管とし、木の継手で接続し、井戸底に水を導く。これらの施設は、幕末から明治にかけて、この地にあった三光院に付隨したものであろう。

護摩堂移転予定地 東西7.5m、南北2mの発掘区を設けた。ここには水田の痕跡はなく、地山層まで瓦を多量に含んだ0.8~0.9mの厚さの包含層があったが、顕著な遺構は検出できなかった。

西塔跡 1955年の調査区に接して、南北7m、東西2mの発掘区を設けた。ここは近世の瓦畠によって大きく搅乱され、ごく一部で基壇土の一部を検出したのにとどまる。この調査区の地山層の上面と信徒会館予定におけるそれとの比高差は、約0.8mである。

まとめ 調査地は、平城京右京1条3坊11坪にあたる。信徒会館予定地で検出したのは、この西大寺創建以前の宅地遺構である。調査面積が小さかったこともあり、遺構の全体配置は確認するに至らなかった。

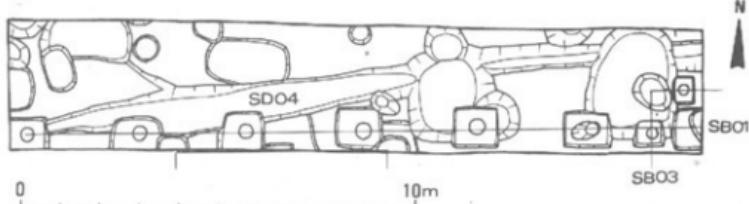
⑥ 法華寺境内の調査（第118~9次）

法華寺横笛堂の移転にともなう事前調査として、鐘楼の東南約40mの畑地に東西約18m、南北約3mのトレンチを入れた。

上層は地表から約50cmが置土・耕土で、以下、中世の遺物を含む茶褐色粘質土及び灰褐色砂質土が20~30cmあり、その下が黄褐色粘質土の地山となる。

検出した遺構は、掘立柱建物あるいは柵1（SB01あるいはSA01）、掘立柱建物2（SB03）、溝1（SD04）、土塹多数である。

SB01（SA01）は、東西棟建物の側柱列ないしは東西柵と考えられ、6間分



第27図 法華寺発掘遺構図

(9.5尺等間)を検出した。柱痕跡から8世紀前半の土師器と平城宮第Ⅲ期の軒丸瓦6282型式G、柱抜取穴から第Ⅳ期の軒丸瓦6138型式Bが出土しており、上限を8世紀中頃に置くことができる。法華寺に関係するものと考えられる。ちなみに、柱列は法華寺講堂の南入側柱列にほぼあう。また、西端の柱穴は伽藍中軸線から約180尺東に位置する。SB02はSB01(SA01)より新しい。南北棟建物の北妻と考えられる。東西2間(9尺等間)。SB03は小規模な建物で、その北西隅を検出したにとどまる。東西1間分(3尺)、南北1間分(4尺)。SB02・03はSB01(SA01)の廃絶後に建てられた雑舎廐の建物で、平安時代に属そう。

溝・土塙は中・近世に属す。このうちSD04は、幅1.2~0.6m、深さ0.3m前後で、北東から南西に斜行する。

遺物は主として土塙から中・近世の瓦が多量に出上したが、他に綠釉土器片・円面鏡各1及び7世紀末~8世紀前半の軒瓦数点が出土した。

⑦ 法華寺阿弥陀浄土院の調査(第118~30次)

この調査は、公立学校共済組合春日野莊外周工事の事前調査として行なった。調査地区は法華寺阿弥陀浄土院の西北の隅にあたる。外周工事の計画にそって逆L字形にトレンチを入れて調査を進めた。今回の調査地区的東南は昭和48年に第80次調査として960m²にわたって調査を行なっている。したがって今回の調査は第80次調査の補足的意味をもっている。

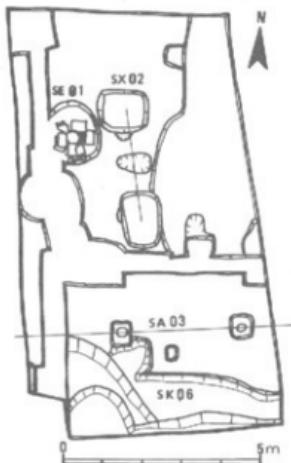
調査の結果、東西大溝SD845・南北溝SD840・暗渠(木樋)2条・井戸1基を検出した。SD845とSD840は、第80次調査でも検出しており、阿弥陀浄土院の北と南の内側をかぎる位置にあるが、SD845からは開さくの時期を示す遺物は出上していない。SD840からは平安時代以後の遺物は出土せず、奈良末に埋ったものと思われる。この南北溝SD845に浄土院の西築地をくぐって流れこむ木樋を検出した。木樋は6枚板の組合せの、外径40cmのものと、くりぬきの蓋をもつ外幅20cmのものとが接合されていた。出土遺物は、木樋の中から木筒1点、SD845から奈良時代から鎌倉時代までの瓦が若干出土している。

⑧ 法隆寺境内の調査 1

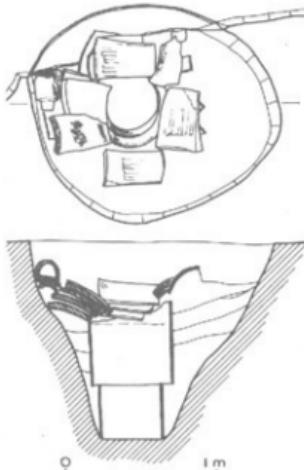
調査地は、東院伽藍の伝法堂の西南約15m、東院の西の築地塀に接する位置にある。発掘は、現法隆寺がこの位置に小規模な門を新営することになり、その事前調査として、奈良国立文化財研究所と県立橿原考古学研究所が共同で行った。東院伽藍の下層からは、1934年に始まった修理工事によって斑鳩宮跡と推定される大規模な掘立柱建物が発見されている。今回の調査地点は、斑鳩宮に関連した遺構の存在が予想されるところである。調査は、門の予定地を東西5.5m、南北11mの範囲で行った。発掘区の層位は、現表土の下に中世の瓦・土器を含む暗褐色土層、奈良時代から平安時代初期の瓦を含む灰青色砂質土層、青灰褐色色砂層、褐色粘土層、黒色粘土層へと移行する。検出遺構は、奈良時代以前の柱掘形、平安時代初期の井戸と掘立柱塀、中世の土塁、近世の溝などがある。

奈良時代以前の遺構 SX02は約 1.2×1 mの掘形である。検出層位とSX02の軸線が現東院伽藍の軸線よりも西偏することから、この時期の遺構と考える。柱痕跡は検出できなかった。

平安時代の遺構 井戸SE01と掘立柱東西塀SA03がある。SE01は、掘形が



第28図 法隆寺東院発掘遺構図

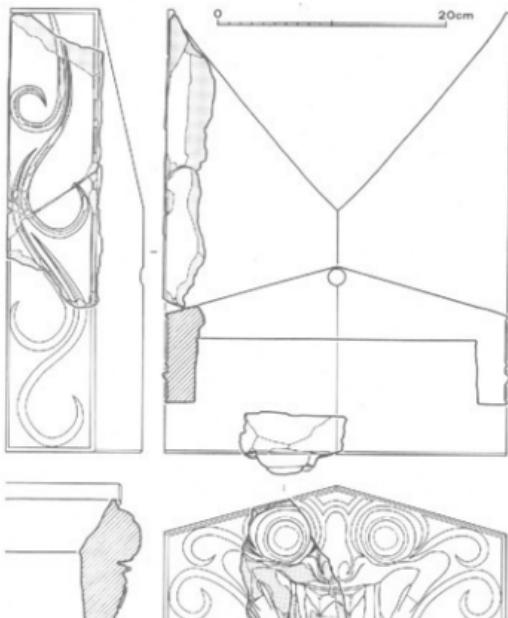


第29図 法隆寺東院井戸発掘遺構図

1.5 × 1.3 m の小さな井戸で、井戸枠に直径 0.55 m × 0.43 m の曲物を 2 段にいれ、井戸枠を四角く開むように上部に軒平瓦を平積みにしている。軒平瓦は側辺を中心に向かって、凸面を上にし、顎当部分と端面が交互にかみ合うようにして各辺 4 ~ 5 枚程度積んでいる。使用している軒平瓦は、6691 型式と、山字形の中心飾をもつ均整唐草文である。井戸の内部からは、瓦片とともに隅木蓋瓦の破片が出土した。東西塀 S A03 は、1 間分を検出。柱間は 3 m (10 尺) である。柱掘形の内部には、瓦片や羽釜の破片が入っていた。

中世の遺構 不整形の土塙 S K06 がある。暗褐色の埋土に瓦や土器片を含んでいる。

隅木蓋瓦の復原 出土した資料は前面と側面の破片であるが、復原を試みた。本例は、前面に鬼面文を飾り、側面に唐草文を表現している。蓋部上面を山形に作るが、下面是平坦なようである。茅負の隅角に嵌めこむための三角形の切り欠きがある。現存部の切りこみからすると、隅角を鋭角・鈍角いずれにも復原可能である。前者は直角の建物に、後者は八角円堂への用途を推定できる。確実な寸法は側面の高さ (7.8 cm) と正面の一部の高さのみであるが、幅 30 cm、長さ 39 cm に復原できる。時代は、文様の特徴からみて、平安初期に推定できる。



第30図 法隆寺東院出土隅木蓋瓦

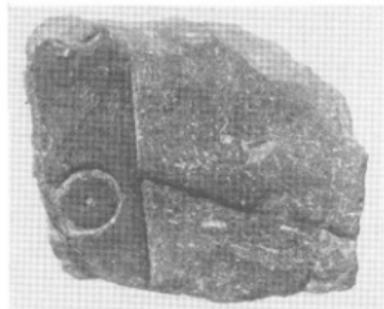
⑨ 法隆寺境内の調査 2

防災工事に伴う調査である。奈良県教育委員会との共同調査。今年度は、伽藍裏山の通称梵天山の貯水槽建設予定地、西院伽藍において上御堂と地蔵堂の周辺を発掘した。

梵天山地区 当初の貯水槽建設予定地は、調査前の踏査によって古墳数基を確認したため、梵天山から南に下がった支丘鞍部の平坦地に変更した。ここに南北トレンチ（ $36 \times 2 m$ ）と、これに直交する 2 本の東西トレンチ（ $10 \times 2 m$ ）を設け、一部を拡張した。検出遺構は、平行する 2 条の疊敷溝である。南北 $18m$ 余を検出。溝相互の距離は約 $1.4 m$ 、溝幅は約 $0.5 m$ 。近世の通路の側溝であろう。

上御堂地区 上御堂西北部に鍵手状にトレンチ（長さ約 $30 m$ 、幅 $3 \sim 4 m$ ）を設けた。表土下に中・近世の整地土が $2 \sim 3$ 層あり、この下が青灰色粘土を主体とした地山となる。検出した遺構は、溝 5 条と土塙多数であるが、ほとんどが中・近世に属す。北端で検出した東西溝（幅 $0.5 m$ 以上）は、中世以前に遡る可能性がある。位置的には西院伽藍の北辺を限る施設に伴うものと考えられる。遺物として、飛鳥時代の軒丸瓦が 3 型式 3 点出土したのが注目される。窯壁とみられるものが出土しているので、あるいは付近に瓦窯があったかもしれない。今後の調査が期待される。

地蔵堂地区 東西トレンチ（ $36 \times 3 m$ ）とこれに直交する南北トレンチ 2 本（ 10×1.5 、 $17 \times 3 m$ ）を設けた。検出遺構は、東西・南北に直交する 2 条の溝、築



第31図 法隆寺出土鶴尾

地の基礎石組 1、石列 4 条、土塙などである。東西溝は瓦を多量に含み、飛鳥時代・奈良時代の軒瓦が出土した。この 2 条が奈良平安時代の溝である以外は、江戸時代以降の遺構である。土塙中から、縦帯に唐草文を墨書きした鶴尾片が出土した。かつて大講堂の周辺で出土した鶴尾片と同一個体の可能性が高い。

II8-2-20

